大菩薩峠



間の山の巻 をその土地に持った伊勢人は、日本中の人間を膝下に引きつけ ので、 なお委しくいえば、伊勢音頭で名高い古市の尾上坂と宇治の浦 を切り拓いて道を作ったのは天正年間のことだそうであります。 る特権を与えられたと同じことで、その余徳のうるおいは蓋し の客の財布をはたかせようと構えております。 田坂の間、 伊勢の大神宮様は日本一の神様。畏くも日本一の神様の宮居 そこには見世物や芸人や乞食がたくさん群がって、参宮 俗に牛谷というところあたりが、いわゆる間の山な

内宮と外宮の間にあるから間の山というのであって、その山という。げくう

莫大なもので、伊勢は津で持つというけれども、神宮で持つと

間の山の巻 あって、金さえもらえば芸妓の腰巻にまで絵を描いたというそ 化のころ世を去った古市寂照寺の住職で乞食月僊という奇僧が にこんな悪名をかぶらせたのだという説もあります。 の月僊和尚の、世間から受けた悪名をそのまま伊勢人全体の上

は一体に物に倹しく、貨殖の道が上手なところから、嫉み半分は一体に物に倹しく、貨殖の道が上手なところから、嫉み半分 ところに乞食が多いからだという説もあります。また、 たものか「伊勢乞食」というロクでもない渾名をつけられてい

伊勢の人は斯様な光栄ある土地に住んでおりながら、どうし 名聞にも事実にも叶うものでありましょう。

いう方が、

ることは甚だ惜しいことであります。

「伊勢乞食」という渾名がどこから出たか、それにはいろいろ

第一、参宮の道者をあてこんで、街道の到る

の説があります。

へ持って行ったのだという説もあります。

大菩薩峠 間の山の巻 は大楼の音頭の色香の艶なるに迷うて、 は千早振神路山の麓 なかなか夜風の涼しさが肌に心地よいくらいで、 夜の賑いも、やっぱり昼と変らないくらいであり かたじけなさに涙をこぼした旅人が、 町の巷を浮かれ歩いて ちまた

夜

げて来るのであります。秋に入ったとはいえ、陽気を受けたこ

上り高のさしを数えて、ぞろぞろと家路をさして引上

長峰の里あたりに巣をくった名物の乞食どもが、

右の間の山から、

中の地蔵、

寒_{むかぜ}

松並木、

が泣けば貢も泣く頃には、

みつぐ

源氏車や菊寿の提灯に火が入って、水色縮緬に緋羅紗の帯が、

捲いて、

いますから、

とは

そんなことはどうでもよろしいが、

伊勢の国に乞食の多いこ

三争われないので、そうしていま申す間の山あたりには、

れが最も多いのであります

間の山の巻 線を包んだ袋を抱えた、まだ年の若い女の子であります。 昼の人出はどこへやら、常明寺から響く鐘の音が、ここばかり この鐘の響を聞くと、よけい、寂しさが身に沁みるように思わ は陰に籠るかと聞きなされて、古市の町の明るい灯を見ながら、 「どうしたのでしょう、呼んでみようかしら、お玉さあ 「夕べ、あしたの鐘の声……なんだかお玉さんのようだねえ」 並木の蔭に立ち止まって、後ろを振返ったのは、片手に三味 それも寒風の松並木のあたりへ来ると、グッと静かになって、

ます。

大菩薩峠

「ほんとに、どうしたのでしょう、わたし淋しくなる、もう一

また常明寺の鐘が鳴る。

お玉さあ――んという声が並木の梢を伝って、田圃の方へ消

大菩薩峠 間の山の巻 申すまでもなくお杉でありました。 玉を知らねばならぬ。 「あいよ」 お玉さあーん」 女にしてはキッパリした声で、向うの闇の間から返事をして、 寒風の松並木のあたりで、連れの名を呼んでみた女の子は、ぽぷかず 古市を知るものは伊勢音頭を知る。 間の山を知る者はお杉お

駈足の気味でこちらへ来るのは、やっぱり同じ年頃の娘姿であっ

小腋には同じように三味線の袋に入れたのを抱え、身なり

度、

呼んでみましょう」

間の山の巻 ど 鳥の群が唖々と過ぎて行く。 それから二人は肩を並べながら、松並木を東へと歩んで行くの であります。 「まだ、鳥が飛んでいるよ、暢気な鳥だねえ」 「今日は少し遅いよ、父さんが怒るだろう、かまやしないけれ 「草履が切れそうになったから」 お 何をしていたの」 お杉はこう言って空を仰ぐと、その頭の上を驚かすように、 ·宝はお杉の立つところへ追いついてから、 少し息を切って、

お杉は口が軽い、歩きながらも何か言ってみねば納まらない

だいていることでありました。

大菩薩峠 間の山の巻 さんせ、抛らさんせで、陽気にやる方が好きだけれど」 だ常明寺の鐘が鳴っているよ、夕べあしたの鐘の声……ね、 んとにお玉さんのお誂えの通りだよ」 「鳥は古巣へ帰れども……お玉さん、お誂え向きだね。あれ、 「けれども陰気だねえ。 「そうですねえ」 「あの烏はどこへ行くのでしょうね」 朝熊山の方に巣があるのでしょうよ」 お杉はお玉の面色をうかがうようにしたが、お玉は真直ぐに お玉は、にこやかに笑った。 お玉は黙って、鳥の過ぎ行く方をながめていたが、 わたしはあんな陰気な歌よりは、 投げ ま ほ

向いたきりで何とも言わなかったから、お杉はまた、

性質であった。

間の山の巻 タと畷道を谷村の方へ急いで参ります。 言って教えたもんだから」 気を引かれてしまいますわ」 の間には、話の蔓がしばらく切れて黙って歩いて行って、 「今は流行らないんだけれど、あれが本歌だと、お母さんが、そ 「あれ、ここは谷村道だよ、それではお玉さん、ここでさよな 「あ、そうでしたねえ、さよなら」 お玉は申しわけのように、これだけを言った。それから二人 お杉とお玉とはここで別れる。お玉に別れたお杉は、スタス

お玉は少しのあいだ立ち止って、お杉の行く後ろ影を見送っ

心してしまうのだからね。わたしだってなんだか悲しくなって、

「それでも、お玉さんがあの歌をうたうと、お客様がみんな感

間の山の巻

大菩薩峠 で見かけることができました。

姿は前と同じですけれど、今度は笠をかぶらず、笠の代りに

それから、いくらもたたない後、

お玉の姿を古市の町の通り

ります。

合せて、袋に入れた三味線を乳呑児のように抱き、一文字の菅前より少し急ぎ足になって、例の黄八丈の大振袖の前を胸に

約束があった」

ていましたが、

「わたしも急ぎましょう、今日は帰ってから古市へ呼ばれるお

笠を俯向きかげんにして、わが家の拝田村の方へと急ぐのであ

大菩薩峠 間の山の巻 行こうとするのでありました。 げている、 味線をかかえていましたが、 た逞しい一頭のムク犬であります。 「今夜は、もう家へ帰ってお休み」 「ムクよ、もうここでよいからお帰りよ」 お玉は、ここから犬だけを帰して、自分ひとり、めざす方へ やさしい言葉をかけられたのは、拝田村の住居から附いて来 いつも柔順に言うことを聞くはずのムクが、帰れと言われて お玉に頭を撫でられながら尾を振ってその面を見上 お帰りと言われても帰ろうともしませんから、

り後をついて来るのでありました。

も今宵はそれを聞き分けずに、お玉が歩きだすとムクはやっぱ

頭から手拭をかけて後ろへ流し、小腋にはやはり袋に入れた三

大菩薩峠 間の山の巻 と、ムクは身を躍らして後ろへは逃げず、行手の方へ走る。 山節を聞かせに行くのだ」 の中を、 ても帰ろうとしませんので、お玉は石を拾って打つ真似をする 「困るねえ」 「お玉に違いない、 「あれは間の山のお玉ではないか」 町の人は早くも、お玉の姿を見つけ出して、 お玉は仕方なく、追わんとした犬に導かれて、古市の町の人込 面を人に見られないようにして行くと、 お玉が、また逗留のお客様に呼ばれて間の

「ムクや、お帰りというのに」

少し言葉を強めて叱るようにして追ってみたが、

犬はどうし

特に町の人の眼を惹くのはほかに理由もあるのであります。

土地の人は、よく知っていて見逃さない。お玉が通ることが、

大菩薩峠 間の山の巻 地の人には覚えられております。 ぼるほど、それほどお玉は土地の人にも旅の人にも覚えられて あるのに、 れ、お玉が行くと言えば、ムク犬が跟いて行くもののように、土 いるのでありました。 「お玉可愛や、ムク犬憎や」 「お玉可愛や、ムク犬憎や」 誰やらが言い出したのを、子供が覚えて、 そうして、お玉が行けば、間の山節を唄いに行くものと思わ 古市の町には、茶屋があり遊女屋があり見世物もあり芝居も お玉を併せてムク犬をも見逃さないのであります。 **「そのなかで、通りかかるお玉の姿が人の口の端にの**

「あれ、案の定、犬がいるわ、ムク犬が跟いて行くわ」

と言って、ムク犬を見かけると、最初は棒を出したり石を投げ

間の山の巻 易に怒らず、容易に吠えないけれど、時あって怒って吠える時 と言って、お玉がいつもムク犬の前に立ち塞がるものだから、 でしまうことがあるくらいですから、子供らの歯には合いませ には、六尺の男が戦慄し、街道を通る牛馬でさえ、立ちすくん てそれに近寄ることを致しません。 子供はベソをかいて引上げる。 そうかと言って、ムク犬がひとりでいる時には、子供はかえっ ムク犬はこの界隈のあらゆる犬より強いのです。ムク犬は容

かけたりしたものでしたが、

「そんな悪戯をするものではありませんよ、怒ると食いつきま

ん、ムク犬もまた子供を嚇すようなことは嘗てしたことがない。

のです。

間の山の巻 ります。 ムク犬とが尋ねて来た前から、 のがあります。 源氏車に散らし桜を染め抜いた備前屋の暖簾の前に、 古市の大楼には柏屋、 これらの四軒には、 兀 油屋、

いずれも名物の伊勢音頭というもいずれも名物の伊勢音頭というも

備前屋、杉本屋などいうのがあ

ちどまりました。

この二つの主従は

お玉はよく間の山節をうたい、ムク犬はよくお玉を守る。

いまや古市の大楼、

備前屋の前へ来て立

この家では伊勢音頭が始まって

お玉と

五人連れの若い侍た

大菩薩峠 おりました。 今宵、その折の音頭のお客というのは、

大菩薩峠 間の山の巻 どうしても江戸の旗本あたりのように綺麗にゆかなかったそう ぶ者や活溌に遊ぶものもずいぶん無いではありませんでしたが、 通りが良かったそうであります。 ふうに目利をしてしまいました。 く……左様、 れたものは薩長でもなく、土佐や肥前でもなく、やはり江戸の であります。それで京都あたりでも、ほんとにあの社会で好か 「これは勤番のお侍でもなく、御三家あたりの御家中でもな 備前屋の主人は、この五人連れの若い侍たちを見て、こんな その頃、どこの色里へ行っても、やはり江戸の者がいちばん 、やはり、 お江戸の旗本衆のお若いところ」 諸大名の家中にも、上品に遊

ちでありました。

侍であったということであります。

東男に京女という諺はいつごろから出来たものか知らないが、

大菩薩峠 間の山の巻 を自慢にする若いのは、どこかで見たことのあるような侍です て好い気持になっております。 中程にいた黒羽二重、色が白くて唇が紅くて、黒目がち、素肌・ の山節はまだ見えぬかな」

間の山節を待ち兼ねて言葉に現われますと、これは芝居に

幾つの提灯と、

のように明るくしている中で、五人連れの若侍は陶然として酔っ

説いている人もありましたが、

事実はやはりその通りであった

かも知れません。

音頭はいま一踊り済んだところで、上の欄間から吊した五十

踊りの間いっぱいに立てられた燈とが満楼を火

たということが、やがて徳川の亡びた理由であると、賢しげに あの頑固な三河武士が、そんな大した通人に出来上ってしまっ 事実はこの時代にやはりそうであったものだそうであります。

間の山の巻 直してお座敷のお客様へ出ますものでございますから、それで、 呼びにやったのであります。呼びにやった時からは、もう大分 た。それを承わった備前屋では、使を拝田村へ立てて、お玉を たっているから、来なければならないはずなのであります。 「昼のうちは間の山へ稼ぎに参りまして、家へ帰ってから、出 「遅いではないか」 名物の伊勢音頭を見たから、その次にこの五人連れの若い侍 もう一つ名物の間の山節を聞こうというのでありまし

う一つお過ごしあそばされませ」

「はい、もうこれへ参りますはずでござりまする、どうぞ、も

出てくる万のに似た仲居の年増。

まする」

その間に、いくらか手間が取れるのでございますが、もう見え

だそうでございますよ」 よく存じませぬが、お玉だけは、今までのお玉とお玉が違うの 杉お玉はその幾代目に当りますことやら、わたくしどもでさえ なっているのでありました。 り間の山節というと、この楼でもお玉を招かねばならぬことに 「お杉お玉も、昔からこの土地に幾代もございまして、今のお 万のに似た仲居は、気が進まないながら、客の問いによって、

の大道乞食がという侮りがあるからであります。それでもやは は乞食歌に過ぎないというさげすみと、何を言うにもお玉風情 それは間の山節なるものが、名こそ風流にも優美にも聞ゆれ、実

間の山節の来る間を芸妓や仲居が取持っているのであります ーお客様が待っているほどに取巻どもは気が進みません。

お玉の来歴を少しばかりでも説いて聞かさねばならぬ義務があ

大菩薩峠 見たい、 「その、 面が好ければ申し分はないではないか。 なんでございます、 いや聞きたい」 声がよくて三味が上 早くその名物が

おっしゃる通り間の山節というの

間の山の巻 ということじゃ。 それにお前がいう通り、

気に召しますと見えまして……」

それでも名物となると、

なんでもないことまでお客様のお

月の前の星でございま

「いや左様ではあるまい、

ものは、

古市古けれども、今のあのお玉とやらのほかにはない

間の山節を昔ながらの調子で聞かす

ちらの音頭の衆などの前へ出ましたら、

様方の前でございますが、

あれは女乞食の出来のよいので、

申すのが評判でお玉は大当りでございますが、ナニあな

「声がよいのと、三味線が上手なのと、面が少しばかり見よいと

るのであります。

大菩薩峠 間の山の巻 もの陽気なものと骨を折りまして、 歌でさえ、この通り花やかなものでございましょう。それに かざり車や、御車や、御室あたりの夕暮に、花の顔みるたかざり車や、砂では、おむる のしみも……

ちら衆の女子の中にはないと申すのが、ほんとうなのでござい

- 手前共の音頭などは、お聞きに入れました通り、陽気な

るのでございます。あんな歌を真似てみようという茶気が、こ

真似手がないというので、わざと捻ったお客様が買被りをなさザポースー

三味の手にしましても数の知れたものでございます、誰も

なに、それは傍で聞いていてほんとに陰気な歌なのでございま

それは、母親から正伝を伝えられたと申すことでございますが、

を昔の型で聞かすというのが、あの子の売り物でございます、

あなた、あの子の唄う間の山節の文句と言ったら、

間の山の巻 から、 房より容貌も位も十段も劣った女に溺れて、 なら品行なら申し分のない女房を持ちながら、 面白いけれども、 来てみたのじゃ。 がほんものの間の山節ということじゃ。 の手にはチーンとか、カーンとかお鉦を入れたくなるではござ いませんか」 「うむ、それそれ、その夕べあしたの鐘の声というのよ、それ こうなんでございます、 夕べあしたの鐘の声、 せっかく来ても聞けるか聞けないかと、 それ数奇者には得て癖がありがち、 なるほど伊勢音頭も花やかでよい、 寂滅為楽とひびけども…… まるでお経ではございませんか、合 今は廃れたという話だ 迷い込む者もある 心配をしながら かえってその女 花やかで

ものよ」

「左様におっしゃれば、そのようなものでござりましょう、

殿

Ŧi.

大楼でまた賑かな伊勢音頭の拍子、

この仲居、なかなか口が達者です。

この時、程近いどこかの

そばしますも旅のお話の種でござりましょう。もう参りそうな ざいますよ。なんに致しませ、間の山節とやらも一度お聞きあ それで世の中は持ったものでございますね、よくしたものでご 様方もさだめて左様なお物好きでいらせられればこそ、お江戸

てお調戯にお下りあそばしまする、鯛も売れれば目刺も売れる、 の美しい花にもお見飽きあそばして、古市くんだりまでこうし

大菩薩峠

「ヨイヨイヨイヤサ」

間の山の巻

間の山の巻 と、中からまた一人の仲居が木戸をあけてくれる。導かれて、 をされた通りに通り抜けて石燈籠の蔭から中庭の方へ参ります でありました。 の蔭からね。中から木戸をあけて上げますよ」 「あ、 万のは差図をするような言いぶりでありました。お玉は差図「ハイ、有難うございます」 「さあ、お玉さん、裏口へお廻りよ、いつもの通りあの石燈籠 奥へ沙汰をすると、例の万のに似た仲居が出て来て、 お玉さんかえ、お客様がお待ち兼ねですよ」

て、片手で源氏車の暖簾を分けて、楼の中へ首をさし入れたの

ムク犬を連れたお玉は、ちょうどこのとき備前屋の前に立っ

「今晩は、間の山の玉でございます、有難うございます」

入って行って見ると、前の五人づれの若侍の大一座。

大菩薩峠 間の山の巻 きの連中もまた、さあこれへ上れということを言いません。 玉の方へと一度に向いてしまいます。 玉は遠慮をして縁より上へは頓に上ろうとも致しません。取巻 と御挨拶を申し上げます。 「早う、お玉の席をこしらえてやるがよい、その毛氈を敷いて、 「間の山のお玉か、待ち兼ねていた、さあこれへ」 「今晩は、 黒羽二重の若侍は、 縁側の前で、お玉は正客の若侍の方と、取巻きの連中の方へ 仲居の万のが跪まると、一座の眼は庭先から導かれて来るお 間の山の玉でございます、 気軽に座敷へ呼び上げようとすると、お 有難うございます」

「間の山のお玉が参りました」

見台が要るならば見台を」

お客の方から催促されても、

お玉もそれきり上へあがろうと

間の山の巻 を二枚、押入から取り出して、クルクルと庭へ敷き並べ、 りますから、席がなんとなくテレて参ります。 席をこしらえてやろうとする気配もなく、眼と眼を見合せてお 上へ、色のさめた毛氈を一枚、申しわけのように載せて、自分 しゅうございます」 「いいえ、こちらでよろしゅうございます、こちらの方がよろ 「承知致しました」 「お玉さんの勝手なのだから、あそこへ敷物を敷いておやり」 万のより一段下の仲居は、もうちゃんと心得たもので、 お玉が辞退しますと、それを機会に万のが、 その

もしなければ、取巻連中もまた客から言いつけられたように、

はサッサと座敷へ上って参ります。

「お玉さん、席が出来ました」

大菩薩峠 間の山の巻 色をした三尺の棹、胴も皮もまた相当に古色を帯びた三味線で せるのである。結局、お玉は縁より上へはあがれぬ身分か。 くのである。楼でお玉を聞かせるには、いつでもこうして聞か と感づきました。お客がお玉を聞くには、いつでもこうして聞 かったのを不思議に思った若侍たちは、 から三味線を取り出しにかかる模様が慣れたものであります。 「ははあ、 お玉はおもむろに袋から三味線を取り出しました。黒ずんだ ここにおいて、先にお玉を座敷へ上げようとして席のテレか なるほど」

その席へ身を載せて、上の方へお辞儀をして、袋をはずして中

お玉は大事そうに三味線を抱えて、草履を克明に脱ぎ並べて、

「有難うございます」

あります。

大菩薩峠 間の山の巻 通り三味を構えた形は、女乞食とは見えぬ、天人が抜け出した 「後ろにあるのは、太秦形の石燈籠、それを背中にして、あの 侍たちの間での囁き。

「あの形がいいね」

ように見ゆる」

味をくずさないのが、お杉お玉の売り物なのでございます」

万のは仔細らしく講釈をしましたが、客はそんな講釈を耳に、、、いい

お玉の方ばかり見ていました。

ると、あの撥で、その鳥目をはっしはっしと受け止めながら、三 して弾き出してから、お客様が面をめあてにお鳥目を投げます。 て音締をして調子を調べる手捌きがまた慣れたものであります。

帯の間から撥を取り出して音締にかかる、ヒラヒラと撥を扱っ

「撥捌きがあれでまんざら捨てたものではございません、ああばばがば

間の山の巻 人交りのできないさげすみの悲しさで、そうした侮りの待遇を たそれを侮りともさげすみとも思っていないという麻痺した習 受けても、自分もそれで是非ないものと思っており、周囲もま 下して納まる人があることであります。 慣のせいだとばかり思っていた黒羽二重は、ここに至って、そ でもないことを何かであるように、我れと深入りをした解釈を 「趣向だな、座敷へ上げないで庭で聞かすところが趣向だわい」 先刻、 独合点をして納まります。通がってみたい人には往々、なんやらられる。 先刻の黒羽二重のは、 お玉が座敷へ通されないことを、身分が違う、 何かまた一人で感に入って膝を丁と打 つまり

「ははあ、なるほど」

うでない、わざと地下へうつして、蓆の上から聞くことが、こ

大菩薩峠 鳥は古巣へ帰れども 花は散りても春は咲く

行きて帰らぬ死出の旅

ろへあしらった、お玉の形がよかったものであります。

それか

おもむろに間の山節の歌、

しまったほど、それほど、庭の中へ、燈籠を少し左へ避けて後

を凝らしたものだと、

るから、

それだから、

わざと庭へおろして聞かせるように趣向 黒羽二重はこういうように独合点をして

の歌の歌い手と、この節の風情に最もよくうつり合うものであ

間の山の巻 ここへ合の手が入る。

聞いて驚く人もなし 寂滅為楽と響けども 夕べあしたの鐘の声

間の山の巻 のが、 だ一人はあったのであります。 この死ぬような間の山節を、死ぬような心地で聞いていたも 遠くでは賑かな音頭、この座敷では死ぬような間の山節。 五人づれの客と、それを取巻くここの一座のほかに、ま

死出の旅

――で低く低く沈んで、唄を無限の底まで引いて行く。 いずれかの大楼ではまたしても賑しき音頭の声、

この時、

「ヨイヨイヨイヤサ」

な音色。お玉の面はやや斜めにして、花は散りても春はさく…… の時、声が甲にかかって、ひとたび冴えていた眼が眠るように、

-で――のたび、人を引張って死出の旅へ連れて行きそう

大菩薩峠 中庭から向うへ張り出した中二階の一間が、間毎間毎の明る

いのと違って、いやに陰気で薄暗い。

それもそのはず、

こには

大菩薩峠 間の山の巻 素人風がこうしているとまでに取れないほど、それほど女の人柄 込むまでに恋をしたというような話も往々あることでした。 のうつりが非常によく、白ゆもじの年増に、年下の男が命を打 ここにいま文を書いている女も、病に悩む女でありましたが、

かった、素人風の地味な扮装でいたから、女によっては、それ古市の遊女は、勝山髷に裲襠というような派手なことをしない。

もうかなり長く使って、文を認めていた女。

間の山節が始まる前に、この一間で墨をすり流して、巻紙を

たことのない一間であります。

女があるとか、

幽霊が出るとか、

そんな噂のしょっちゅう絶え

をよく見せるのでありました。

病気に悩む女、間夫狂いをする女、それらを保養と監禁と両方

の意味に使用されるところですから、ここで血を吐いて死んだ

大菩薩峠 間の山の巻 ると、 と来たものです。 して時々は泣いている。そこへ前の、 書きさしていた筆をハラリと落して、じっと耳を澄ましてい 行きて帰らぬ死出の旅 鳥は古巣へ帰れども 花は散りても春は咲く 聞いて驚く人もなし 寂滅為楽と響けども 夕べあしたの鐘の声 お玉の弾きなす合の手が綾になって流れ散る。

朱塗りの角行燈の下で、筆を走らせては、

また引止め、そう

しまおうかしら」

「ああ、

間の山節が聞える、死にたい死にたい、いっそ死んで

間の山の巻 この時の吠え声は人を驚かすほどに高い声ではなかったから、 て吠えました。ムク犬が声を立てることは珍らしい。しかし、 この時、 野辺より彼方の友とては…… 表に待っていたムク犬が、 低く唸るように声を引い

巻きの連中は、忌々しい腹で聞いている。ここの二階では、

ぬつもりで聞いている。お玉は無心で、母親から伝えられたと

いう節のままを天性の才能で唄っている。

記したような光景であります。

広間では五人づれの若侍が、

風流の気取りで聞いている。

取

どにそれをあけて下を見おろすと、植込の間から、かがやくば

ついと立って障子の破れから庭をのぞいて見たが、身の幅ほ

かりなる提灯燭台の広間と、うすぼんやりの燈籠の庭では前に

誰もムク犬が鳴いたとさえ気がつかなかったのを、弾きさして

間の山の巻 夜もかなり更けていました。門を出ればムク犬が待っていて、 暗示になります。 すばかりにしました。 のです。 尾を振って迎えるはずのが、どうしたものか影も形も見せない からムク犬は吠えませんでした。 二声目を聞こうとしたが、それはそれだけで納まって、それ お玉は、いくらかの紙包を貰って備前屋を出た時分は、もう ムク犬の吠える時は、 お玉にとっては、きっとそれが何かの

「ムクや、ムクはどこへ行ったろう」

お玉は呼んでみましたけれども、ムク犬は声も形もあらわし

いたお玉の三味線にはそれがこたえて、お玉はハッと撥を取落

大菩薩峠 間の山の巻 して、 「はい」 もし」 お玉は足をとどめますと、裏の木戸をそっとあけて、 暗いところから声があったのは、尋ねるムク犬の声ではなく 呼びながら、この備前屋の裏の方へ廻ってしまいますと、 細い女の声でありました。

「お前様は、あの、お庭で間の山節を唄いなすったお玉さん」

玉の胸には安からぬ思いであります。

「ムクや、ムクや」

ないで一緒に来て、来てみれば帰る時は姿を見せぬ、さっき低

く吠えた時と言い、今こうして見えなくなったことと言い、お

までにないことであります。ことに今宵は帰れというのを聞か

ません。ムク犬が、お玉と一緒に来て、一緒に帰らぬことは今

大菩薩峠 間の山の巻 女衆などの間には、こんなことはないことでもない、あれほど きりで、ふいと木戸を締めて身を隠してしまいました。 申しましたぞえ……」 の頼み、引受けて宛名のところへとどけて上げるも功徳であろ いてありまする、こうしている間も心が急く、それではお頼み れをお届け下さりませ、届け先は……それはこの手紙の表に書 「委細はこれに認めてござりまする、この手紙とこのお金、こ 「何でございますか、叶いますことならば」 「お見かけ申して、お頼み申したいことがありまする」 女は一封の手紙と、金包とをお玉に渡してしかじかと頼んだ 夜番の拍子木が聞える。 お玉は、そこはかな物の頼みようと思いましたけれども、 遊

「左様でございます」

間の山の巻 きりに犬を尋ねて、備前屋のまわりを廻ると夜番に出会します。 せんでした。 「はい」 「ムクや、ほんとにムクはどうしたのだろうねえ」 「なんでこんなところをウロウロしているだ」 「間の山のお玉さんではねえか」 「御安心なさいませ、きっとお届け申し上げますから」 夜番の男もまたお玉を知っていました。 お玉はいま、女から受取った手紙と金とを懐中に入れて、し 塀の外から請合ったが、この時はもう中からは挨拶がありま

大菩薩峠

「ムクが見えませんから……夜番さん、ムクをどこぞで見ませ

んでしたか」

大菩薩峠 間の山の巻 ところを、手拭を頭から被って後ろへ流し、三味線を後生大事ところを、手拭を頭から被って後ろへ流し、三味線を後生大事 玉は已むことを得ず、ひとりで帰りの路に就きます。 ないというので失望して、とうとう備前屋の周囲を一廻りして に抱えてさっさと歩いて行きます。 しまいました。 今宵はお客様の強っての所望で二度まで間の山節をうたい返 来た時と同じように、町の隅の方の人目にかからないような いくらムクを尋ねても、ムクは声も形も見えませんから、 お

「知らねえ」

「左様でございますか」

お玉は夜番にまでムクのことを聞いてみたが、やっぱり知ら

した上、その因由などを知っている限り話させられたので、こ

大菩薩峠 間の山の巻 心細 「送ってやろうか」 「危ない」 「ムクがいないや、ムクを連れないでお玉が帰る」 「ひとりで帰るねえ」 「お玉が帰るよ」 「お玉が帰るじゃないか」 「ムク犬の代りをつとめるかな、犬の代りに狼、送り狼」 「でも一人で拝田村まで帰すのはかわいそうだ」 地廻りの連中がこんなことを言い囃すものですから、お玉もピサル。

いくらか気味が悪い、それでムクのいないことが、いよいよ物淋

れほど晩くなろうとは思わなかった、拝田村まで帰るには淋しれまと。

いところもあるのだから、こうしてみるとムクのいないことが

大菩薩峠 間の山の巻 と、それは思いがけなく一組の印籠でありました。 りました。 やろうとすると、ムクがその口に何か物を啣えていることを知 「おや、 「何だえ、 お玉はそれを、町の方へ向けてなるべく明るいようにして、仔 頭を撫でながら、ムクの啣えているものを取りはずして見る 結構な印籠が……」 お前、何か啣えているね」

うど町の外れへ来た時分に、ふいに飛び出して、お玉の裾へま しくなって、足の運びは駈けるようになって行きますと、ちょ

つわりついたものがあります。

「まあ、ムクかえ、どこにいたの、どこを歩いていたの

お玉は嬉しくてたまらない、腰を屈めてムクの背中を擦って

細に見ると、梨子地に住吉の浜を蒔絵にした四重の印籠に、翁紫は、ままま

大菩薩峠 間の山の巻 衆から頼まれた手紙と金包とに気がついて、今宵は懐の重いこ なんだかおっくうだから、明日の朝にしましょう、明日の朝、 かえ、どこで拾ったの」 とをいまさらに感づいたようでした。 し早く起きて、出がけに御番所へ届けるとしましょう」 の持物だよ、 「これは並大抵の人の持つ品ではない、きっと立派なお侍さん」 お玉は、その印籠をまた懐中へ入れますと、前に備前屋で女 犬は神妙に首を俛れております。 御番所へお届けをしよう。でもこれから帰るのも

いるね。

おや、この顋のところから血が……」

「おや、

足の方は泥だらけになって。

それにお前、

怪我をして

を出した象牙の根付でありましたから、

「こんな結構な印籠を、

お前どこから持って来たえ、拾ったの

上げるから」 「洗って上げるからおいで、そこの流れで洗って、創を巻いて

大した怪我ではないが、ムクはたしかに怪我をしている。

備前屋の楼上で二つの大変が持ち上りました。その一つの大変 れの侍が朝起きて見ると、一人残らず懐中のものを奪われてい は、ゆうべ音頭を見て、間の山節を聞いて、酔うて寝た五人づ ジ玉が帰ってからその晩は無事でありましたが、

お

朝になると、

間の山の巻

大菩薩峠

ることでありました。

印籠までも盗られてしまいました。

さすがに腰の物だけは残されてあったが、懐中物の全部と、

間の山の巻 伊勢の古市のこれこれへ行って盗賊にやられたという噂が立つ そこは時と場合で、そうクヨクヨ言ってもおられないのであり れたのでは、あまり芳ばしい土産話にはならないのです。五人 のは、大楼の暖簾の手前もある、備前屋の主人は恐縮して、家 のお客も内心の腹立ちと悄気方は一通りでないのですけれども、 お客の方が困るばかりでなく、店の方ではなおさら困ります。

旅に来て路用を失くすることは誰にしても好い心持はしない。 着いて見せるのもありました。しかし大変は大変でありました。

あっと面色を変えたものもある、なあーにとさあらぬ体に落

ことに女にうつつを抜かしている間に、肝腎のものをしてやら

するのをお客たちは差留めて、

の内と外とを隅から隅まで調べさせて、役人へも訴え出ようと

間の山の巻 な面付に見えるものは一人もありませんでした。 をして、いちいち裸にするまでにして調べたけれども、 一つも出ては来ず、また、こいつが取ったろうと思われるよう 備前屋の主人は、家族から雇人、芸妓遊女の類を悉く足留め

品物は

「どうもなんとも困ったことで、全く以て申しわけがないこと

不思議であります。

ではなかったようです。

別段に他から賊の入った様子が見えないこと、これが第二の

てもらいたくない」

「あればあったでよし、なければないでよいから、表沙汰にし

彼等には彼等の身分というものがあって、表向きにされた時 かえって金銭には換えられない恥を取るという懸念もない

間の山の巻 ないのはそのお玉ばかりでありました。 合せました。宵からここへ出入りをした者で、ここに面の足り 山のお玉が、その塀の裏の方をウロウロしていたが、 と言って、主人を囲んでそこに集まるほどの者がみんな眼を見 んですかえ、こちら様へお呼ばれなすったのですかえ」 「へえ、お玉さんが裏の潜りのところから出て塀をグルリと廻っ 「あ、お玉……」 「昨夜わしが夜番をして、こちらの裏の方を廻ると、 「お玉がなにかえ、この家の裏の方を……」 お玉がな あの間の

「ははあ、

お玉がかい」

夜番の男が口を出して、

備前屋の主人が額へ手を当て当惑するところへ、愚直らしい

間の山の巻 す。 を手で補って、 その時に、 「どうして?」 「大変とは?」 「タタタ大変でござりまする、離れの中二階で……」 「あの離れの中二階で、 仲居の女はこうしてと言って、 仲居の一人が第二の大変をその場へ知らせて来たのでありま 同は、 お玉の名を言い合せてその眼が怪しく光りました。 咽喉を掻き切る真似をしたのですから、 お登和さんが……こうして」 血相が変って口が利けないの 備前屋

大菩薩峠

「お登和が咽喉を突いたと!」

盗賊は大きくとも物品に関することであるが、ここに報告さ

の主人は仰天しました。

間の山の巻 だ、血で辷ってはいけない、 く脈を見てみるがいい、気味の悪いことがあるものか、血だ、血 絞って叩きつけたようなその真中に突伏した年増の遊女――そ と怪我をする」 そっと渡して頼んだ女、ここではお登和と呼ばれている女―― なにも立て廻してはなく、八畳の間いっぱいに血汐。蘇枋染をなにも立て廻してはなく、八畳の間いっぱいに血汐。蘇枋タデめ れて来た第二の大変は人命に関することでありました。 れは昨晩、間の山節をここで聞いた女、また手紙と金とをお玉に 「ああ、やったな、危ないとは思ったが、とうとうやったな。早 「あつ!」 「みんな早く……」 主人は先へ立って飛んで離れの中二階へ来て見ると、 刃物を取ってしまえ、刃物に触る

主人が指図して雇人が抱き起して見ると凄い、咽喉笛を掻き

間の山の巻 まった女であります。幸か不幸か、男の真三郎は冥土へ行った という恋人と思い思われてついに近江の琵琶湖に身を沈めてし この名を覚えている人があるでありましょう、それは同じ伊勢 の国で亀山の生れ、家は相当の家でありますけれども、真三郎

のにお豊だけはこの世に生き残って、大和の国三輪の里の親戚

まって、皮膚の色は蝋のように真白くなっているところへ、そ

の血が柘榴を噛んで噛み散らしたように滲んでいます。

遺書のこと・・・・・豊」

それが行燈の下に置いてあります。お豊―

-読者のうちには

「飛んでもないことをしてしまった」

手先でしっかり握って、左の手を持ち添えて、力任せに掻き切っ 切ったのは堺出来のよく切れる剃刀で、それを痩せこけた右の

なるよう

て抉ったもので、そこから身体中の血という血はみんな出てした。

大菩薩峠 間の山の巻 記してあるのは、 りません。 宛てた一通だけで、ほかにはどこを探してもそれらしいのがあ よくよくあの歌につまされたものでしょう、 花 鳥は古巣へ帰れども は散りても春は咲く 遺書の書出しに

あとにしてどこへか逃れて行ったが―

-落着く運命はついにこ

の明を失った机竜之助を介抱して、呪いの火に焼ける竜神村を

という温泉場の宿屋のおかみさんにまでなってしまった。

とになってしまった。

へ預けられている間に、京都を漂浪して来た机竜之助と会うこ

それがまた飛び放れて、

紀伊の国の竜神

両

こでありました。

今度こそは生き返る心配はありませんでした。

遺書は主人へ

間の山の巻

のお馬について来た「蠅」が今の拝田村の中の一部落の先祖だ からこの伊勢の国五十鈴川のほとりへおうつりになった時、そ

少しく来歴を異にしていました。大神宮様が大和の国笠縫の里 三玉の家のあるところは、拝田村の中の一部落であって、そ

お

行きて帰らぬ死出の旅

たのですから、生え抜きの穢多なのであります。 部落なのであります。そうしてお玉もそこで生れてそこで育っ の部落は特殊の因縁つきの部落であります。 因縁つきの部落とは、あからさまに言ってしまえば「穢多」の 一口に穢多とはいうけれども、ここの穢多は他所の穢多とは

大菩薩峠 間の山の巻 るというのであります。 ら容貌のすぐれた女の子が、 史の一民族だともいう。 で、 が出る。「好色伊勢物語」という本に、 の先祖だということはここよりほかには聞かないこと。 それですから、 隼人をその後には訛って「ほいと」と呼ぶ。 けれども、それはわざとそんなことを言って軽蔑したがるの 蝿はすなわち隼人、 、間の祖先と猿と同じいということは学者がいう、蠅が人間 お杉お玉のうちにはどうかすると抜群の美人 隼人はすなわち大和民族のほかの古代 お杉お玉となって間の山へ現われ 「ほいと」の中か

うたひて、余念なく居りけるを、参詣の人、彼が麗はしき顔色

「その容姿麗はしくして都はづかし、

三絃胡弓に得ならぬ歌

ということであります。

間の山の巻 たということであります。 と、武術の達人が投げた手裏剣をも外すの妙に至るものが出来 子供の時分から精を出していますから、天性上手なものになる り、笠を傾けて受けたり、撥で発止と受けたりします。 三味を弾くことの練習と一緒に、銭を受けることの練習をも こういってあやかりたがるほどの両人が容貌も、それに投げ お杉お玉が旅人の投げる銭を受けるのは、 るを、かいふりてあてらるることなし」 お杉お玉が化粧の水 水になりたやお伊勢の水に 面を反けて受けたかない。それ

に心をとられて銭を投掛くること雨の降り霧の飛ぶが如くな

つける銭と同じことで、打ち込んでみた時には必ず外される。 近寄れるけれども、触れることのできない美しさ、美しい哉、

大菩薩峠 間の山の巻 を娘のために遺品として、今は世にない人でありました。 父が何者であるかを知らないのでありました。お玉の母はその 「ほいと」と一緒に腐ってしまう覚悟でなければならぬ。 の正調と、手慣れた一挺の三味線と、忠義なる一頭のムク犬と りました。そこに悲しい物語があって、今のお玉は現在自分の る間に、この苦しい瀬戸を越えて今のお玉を産み落したのであ ぬ運命を持っていました。もしその美しさに触れんとならば、 今のお玉の母が、やはりこの部落から出て、お玉を勤めてい やはりこの部落の中で味気ない一生を早く終って、間の山

「ムクや、これからお役所へ行くのだよ」

玉は今朝、いつもより早く起きて朝飯を済ましてしまい、

「ほいと」の娘はついに「ほいと」の娘で朽ちてしまわねばなら

間の山の巻 悲しいことにお玉は字が読めない女でありました。 は周囲の狭い天地で育っているのでありました。 それを恥だともなんとも感じたことのないほど、それほどお玉 「まあいいわ、この印籠の方だけ届けておいて、この手紙の上書 字が読めなくっても、今までに不自由を感じたこともないし、

は誰かに読んでもらいましょう、間の山へ行けば講釈の先生も

紙に書いてあるからと聞いたばかりでまだ調べて見なかったが、 屋の裏口で頼まれたお金と手紙、どこへ届けるのだか、この手 目に見た時よりもいっそう立派なものでありました。次に備前

口で頼まれた手紙とお金をもその頼まれたところへ届けてしま 山へ出がけにお役所へ届けて、そのついでに昨晩、備前屋の裏

昨晩ムクが啣えて来た印籠を取り出して、それを今日は間の

いたいと、こう思ったので、まず印籠を取り出して見ると、夜

大菩薩峠 間の山の巻 お金。 に小さな草刈籠を背負い、 の子供でありました。 んだか心持が悪い」 「お金のことがいっそう心配だわ、 「お玉ちゃん」 これは、ついこの隣りから、同じ間の山へ莚を敷く 子供の声。 その時に、 お玉は手紙だけを懐中へ入れて、次にそれと一緒に頼まれた ことし五歳で、 木製の草刈鎌を持って、足柄山を踊 お金を預かっているのはな 体に相当した襦袢

いるわ、それでも遅いことはないでしょうと、わたし思う」

る男の子でありました。

「金ちゃんかえ、おや、もうお仕度が出来て。お母さんは」

大菩薩峠 間の山の巻 り出して見せると、 あごらんなさい」 縁側へ招いて、 まあお掛けなさいまし」 さんのところへちょっとお寄り申そうと思っていたところなの、 「おかみさん、昨晩、 包みかけたのをワザワザ解いて、ムクが啣えて来た印籠を取 お玉は包みかけたものをそのままにして、金ちゃんの母親を わたしはこんな拾い物をしたのですよ、ま

「お早うございます。 「お玉さん、お早う」

おばさん、わたしはいま出がけに、お前

垣根の外にお母さんがいる。

も安いものじゃありませんねえ」

「おやおや、たいそう結構な印籠

金蒔絵で、この打紐も根付きんまきえ

間の山の巻 玉にはそれが気がかりにならないことはありませんけれど、話 お杉さんに、そうおっしゃって下さいまし」 わたしの間に合わない時には、お鶴さんを頼んで下さるように、 しかけた筋は通さねばなりませんから、 てか頭を立てて竹藪の中へ真直ぐに眼を注ぎました。 この時まで温和しく縁先に坐っていたムク犬が、何に気がつい 「そういうわけで、わたしは山田へ廻りますから、もし後れて、 お玉が、金ちゃんの母親を呼び込んだのは、この言伝をして ムク犬が竹藪を見込んだことは、なにか仔細がありげで、

思いまして、それで今日は少し廻り道をして山田の方まで……」

「あんまり結構な品ですから、お役所へ届けなくては悪かろうと

んの母親は目をすまして、その結構な印籠をながめていると、

三は、昨晩これを拾った始末を話そうとしている、金ちゃ

間の山の巻 その狐も今は絶えてしまったようだし、狼もムクを怖れて、幾 ムクが出動をする場合は、大抵この二つの場合でありましたが、 と驀然に藪の中をめがけて飛び込んでしまいました。 「そうかも知れません」 「狐が出たのでしょうよ」 「どうしたんでしょう、ムクが落着かないこと」 ムクはしばしば狐を取り、狼を追いかけることがありました。 お玉もまた竹藪の中を見込んで思案顔。 この時に、竹藪の中を見込んでいたムク犬は、急に起き上る

もらいたいからでありました。

「へえ、よろしゅうございますとも」

き非常のことが一つもなかったのです。無論、それと知ってこ 年にもその影を見せませんから、この村には、今ムクを起すべ

間の山の巻 える薬の行商体の人でありまして、その男が木戸口からお玉の を唸りつけるムクの声、竹藪の中がガサガサすると見れば、そ をしています。 こから飛んで出たムクは、今度は一散に木戸の方へと走りまし 「ムクや、ムクや」 「狼が来るはずはありませんね」 その木戸口から今、一人の人が入って来る、よくこの辺に見 お玉は縁側へ立ち上ってムクを呼びますと、しばらくして物 金ちゃんの母親も、

の村あたりを犯す盗人の類がある由もありません。

人に向って、噛みつかんばかりに猛然として迫って行きます。

いる方へ進んで来ますと、いま竹藪から走り出したムクはその

大菩薩峠 間の山の巻 今は全くそれと違いますから、 眠れるものの如くして、嘗てそれに吠えついたことはないのに、 勢が荒くなるのでありました。 りませんでした。その男が一歩進めば一歩進むほど、ムクの気 われておりますから、 「ムク、人様を吠えてはいけませんよ」 お玉はこっちで犬を制したけれども、ムクは決して柔順にな いかなる人が、どんな異様な風采をして来ようとも、ムクは

見れば、絶えて久しく現われなかった狼を追う時の眼の色が現

にまだ噛みつきも、食いつきもしませんけれど、ムクの気勢を

ムクは近寄らせまいと肉薄しているようにも見えます。

ようにして、お玉のいる方へ近寄って来ようとします。それを

行商体の男は、タジタジとしましたけれども、犬をなだめる

大菩薩峠 間の山の巻 した。 玉のいるところへ来て、 に立ち塞がって、強弩の勢いを張っておりました。 ようにして行商体の男は、 「いつもこんなに吠えるのではないのですけれど……ムク、な 「たいへん強そうな犬でございますねえ」 「お早うございます」 「お早うございます」 「この犬は気が違ったのではないかしら」 行商体の男はお世辞を言って、縁側へ腰を下ろしてしまいま お玉も来る人に気の毒でたまらない。洪水の中をやっと泳ぐ 人間同士はあたりまえの挨拶をしたけれども、犬は人間の間 ムク犬の鋭い威勢を避けながら、 ぉ

ぜそう聞きわけがないのです」

大菩薩峠 間の山の巻 き抜けて、前のところへ戻って来て、行商体の男に向って鋭い んで行きましたが、そこでまた烈しく吠えます。 ムクは、急に身を翻えして家の土間を潜り抜けて裏手の方へ飛 「ちょっ、どうしたと言うんでしょう、あっちこっちで吠え廻っ 「ちょいと拝見、結構な印籠でございますね」 「ムクや、ムクや」 烈しく吠えていたムクはこの呼び声で、また驀然に土間を突 お玉はムクの吠えている裏口の方へ身をよじらせて、 行商体の男が手を差伸べると、なお頻りに唸りつづけていた

の母親に見せた印籠やなにかを包みに蔵おうとすると、

お玉は言いわけをしたり、叱ったりしながら、いま金ちゃん

睨め方。

間の山の巻 ょ ると、男はそれを捻くって、しきりにながめておりましたが、 の山へおいでになるお玉さんというのではございませんか」 で拾いました」 「古市で……そうでございましたか。あのもし、あなた様は間 「拾い物、とおっしゃると、ちと心当りがありますね、どちら 「昨晩、古市で」 「うちなんぞにある品ではございません、拾い物でございます 「それに紐と言い、根付と言い、安い品じゃございません」 「そうでございましょう、松がよく出来ておりますね」 お玉は、行商体の男が見たいというのだからその印籠を見せ

「梨地に金蒔絵……絵は住吉の浜でございますな」

「はい、私がその玉でございますが」

間の山の巻 大菩薩峠 行商体の男は、ジロリとお玉の面から家の中を一廻り見廻して、 を突き抜けて裏口へ廻ってそこで烈しく吠えます。 なた様にお心当りとおっしゃるのは……」 ですから、これからお届けに参ろうと存じます。そうして、あ 「まあ、騒々しいことといったら」 「お伺い致しました、その帰り途にこの印籠を拾いましたもの 「昨晩もあの、おいでになりましたか」 物狂わしいムク犬は、またしてもここを捨てておいて、土間。タペペ お玉は、どうにもムク犬が制し切れないので困っていると、

「お玉さん、お前さんこのお家に一人かね」

昨晩も」

「へえ、あそこはたびたび御贔屓になっておりまする、そして

「そうして昨晩、備前屋へお招ばれなすったお玉さん」

大菩薩峠 間の山の巻 まいました。 来った猛犬ムクは、物も言わせず大の男を縁より噛み伏せてし かえ、それとも一人で仕事をして帰ったのかえ」 「まあ、どうしたと言うんでしょう、わたしにはわからない、わ 「あれ――」 「とぼけるな、お玉御用だ!」 「連れがあったかとおっしゃるのは……」 「そうしてなにかえ、ゆうべ備前屋から帰りに連れがあったの 懐ろから飛び出した銀磨きの十手。 お玉の細い腕を逆に取る時、雷電の一時に落つるが如く飛び

「ええ、ここは一人、向うが叔父の家」

なんだか薄気味の悪い問いぶり。

たしにはわからない、わかりやしない」

間の山の巻 足を揃えて猛然と備えたムク犬。 「わたしは何も……わたしは何も、

お役人様に召捕られるよう

込んで来た。その出会頭に、眼を瞋らし、歯を咬み鳴らし、両いんで来た。

比較的に穏かな御用の掛声で、ドヤドヤと裏口からこの家へ押

表でこの騒ぎを知るや知らずや、今度は正銘の捕方が五人、

たしても土間を突き抜けて驀然に裏口へ飛んで行きました。

ムクはそのまま噛捨てにして、クルリと身を転ずるや、ま

行商体の男の有様こそ無惨なもので、面の全部を腮から噛ま お玉はあまりのことに、飛び上って、突っ立ったきりです。

銀磨きの十手を抛り出してそこへ突んのめってしまった

御用」

な悪いことをした覚えはありません、それだのに、何もわけを

お話し下さらずにわたしを捉まえようとなさるのは、あんまり、

大菩薩峠 間の山の巻 る。 男に飛びついたムクは、 ら入って来る人数を見ると、 わないから逃げるわ、 しまいました。 「それ、 「あっ」 「わたし、逃げるわ、 お玉が逃げ出したと見た捕方が追いかけようとする、 お玉は無分別に、 お玉はオロオロ声で愚痴を言いましたけれども、 お玉が逃げる、逃がすな」 跣足で縁を飛び下りて、無暗に逃げ出して あとでわかることでしょうから逃げるわ」 何も悪いことをしないのに捉まっては合 咽喉笛をグサと啣えて、邪慳に横に振のどぶえ 、わけもわからずに怖くなって、 いま裏口か 真党の

「憎い犬め!」

あんまり酷い」

守る獣の王はまさしく犬であります。真に守ることを知る犬が、 す。ムク犬はそのよく守ることを知る犬でありました。 その天職に殉ずる時は獅子と相当ることすらできるのでありま すべて攻める獣であって、もし獅子を攻める獣の王とすれば、 ける凄まじさ。 と噛みついた、素早いこと。 んと振りかざせば、その刃を飛びくぐって、跳ねつき、唸りつ 「斬れ斬れ、叩っ斬れ」 それがために、お玉は捕えられずに逃げ出すことができまし 獣にも攻める獣と守る獣とがあります。山野における猛獣は あまりの猛勢にぜひなく白刃を抜いて、一刀の下に斬り捨て

次のが十手で一撃を加えるのを、その手を潜って面にガブリ

たが、逃げ出したことが、お玉にとって幸か不幸か、それはま

馬を追

間の山の巻

だわかりませんでした。

仮りにも役目で向った人たちに、

かか

悲しい哉、

ムク犬に

る猛烈な正当防衛を試むることの理非は

は

判断がつきませんでした。

に近い荒家の中で、

隠ヶ間 留まれ留まれと袖を曳く それを殿御が聞きつけ 十七姫御が旅に立つ (尾上山)

大菩薩峠 明日は吉日日も好いで それで留まらぬものならば

い出せ弥太郎殿

間の山の巻 ぐらい、 キャキャキャ、 が捲いて起りました。 で二三羽の鶏が餌を漁って歩いていると、 に鶏頭が立っている。 の上へ飛んで羽バタキをする、 「また来やがったな」 とんぼ口から飛び出したのは、一人の子供……身の丈は四尺 れはしごく暢気な鼻歌でありました。 産土参りをしましょうかタシネサなまい 諸肌脱ぎで、 ^{もろはだぬ} けたたましくその鶏が鳴き出して、 手に一本の竿を持って、 誰も子供が出たと思います。 穀物だの芋だのが干してあって、 平和な田舎家の庭に不意に旋風 家の外には秋草の中 何に驚いてか、 ひょいと飛び出 小屋の屋根 蓆の上 キャ

大菩薩峠

しかしよくよく見れば、

したところを見れば、

猿のようで口が大きい、額には仔細らしく三筋ばかりの皺が畳

子供ではないのでありました。

面ぉ は

大菩薩峠 間の山の巻 ら引っこぬくように、鼬を竿の先から抜き取って、それを地面へ 田楽刺しになった黒い物は一疋の鼬でありました。焼鳥を串か 揚々としてその竿を手元に繰り込んで来ると、その竿の先に

で引き出すと、その先へ田楽刺しに刺された黒いもの。

いきなり手に持っていた長い竿を秋草の植込の中へ突っ込ん

「ざまあ見ろ」

押立てている恰好たらない。

「こん畜生」

柄を見れば子供、面を見れば老人、肉を見れば錚々たる壮俊。

全体の釣合いからいえばよく整うていて不具ではないが、

ことにおかしいのはその頭で、茶筅を頭の真中で五寸ばかり

きつけたように締って、神将の名作を型にとって小さくした骨

んである。といって年寄ではない、隆々とした筋肉、鉄片を叩

間の山の巻 大菩薩峠 歌っていたが、 これがこの先生の得意の鼻歌であると覚しく、 それで留まらぬものならば 留まれ留まれと袖を曳く それを殿御が聞きつけて 前にもこれを

馬を追い出せ弥太郎殿……

なる穂先が菱のように立てられてあるのでありました。

を遂げたことを弔うかのように鼬の屍骸を遠くから廻って、ク

クと鳴いているのであります。

「かまあねえから突っついて食ってしまえ、食ってしまえ」

竿の先を巾で拭いているところを見ると、二寸ばかりの鋭利

叩きつけると、

屋根の上へ飛び上った鶏がホッと安心したよう いま自分たちを襲うた強敵が脆くも無惨な最期

に下りて来て、

大菩薩峠 間の山の巻 米友というのでありました。そこへ駈け込んで来たのは、 で変ってらあ」 にもかも夢中で我が家を逃げ出して来たお玉であります。 「米友さん、大変なんだよ、大変が出来たんだから、わたしを 「どうしたんだい、玉ちゃん、跣足で、息を切って。唇の色ま 「米友さん」 「誰だい、玉ちゃんかい」 「米友さん、米友さん、家にいるの、よう米友さん」 息を切った女の子の声 この子供のような年寄のような壮者のような奇妙な男の名は 今な

この時、

裏手の方で、

隠して下さい」

「大変というのは、

いったいどうしたんだい」

大菩薩峠 間の山の巻 間にも追蒐けて来るかも知れないから、早く隠して下さいよう」 違いなんだろう」 がここで仕事をしている、役人が来ても知らないと言うよ」 めい逃げて来たの」 「ここへ来れば大丈夫だよ、お前あの戸棚へ入っていれば、俺 「何だか、それがわかるくらいなら間違やしない、こうしている 「早く、それでは戸棚へ入れておくれ」 「玉ちゃんを役人が捉まえるって? 「何の間違いだろう」 「間違いなんだよ」 おかしいなあ、何かの間

「まだいいよ、足音が聞えてからでいいよ」

わたしを捉まえて行こうとするもんだから、わたしは一生けん

「わたしは何も悪いことをした覚えはないのに、お役人が来て

間の山の巻 役人に捉まろうとする時にムクは黙っていたかえ」 はどうしたんだえ、ムクが付いているはずじゃないか、 い、ムクは殺されてしまいます、早く」 「ムクがお役人に噛みついている間に、わたしはここまで逃げ 「ムクはお前の捉まりそうな時に、やっぱり家にいたのかい」 「ムク?」 「米友さん、ムクを助けて来て下さい、早くムクを助けて下さ 「ナニ、嚇すだけだからいいよ。そりゃそうと玉ちゃん、ムク 「だってお前、役人に手向いしちゃ悪いよ」 「もし役人がぐずぐず言えば、この竿で嚇かしてやらあ」 ムク、ああそうだ。 お前が

「だってお前」

て来たのよ、ムクのおかげでわたしは助かったのだから、お前

大菩薩峠 間の山の巻 さい」 柱にかけてあった五色の網の袋を差し込んで、それを小腋にす せねえでつれて来るから」 いて、お役人にも怪我をさせねえようにして、ムクも怪我をさ いなんぞをしないようにさ、そうしてムクだけを助けて来て下 「どうぞ頼みますよ」 「大丈夫だよ、安心して隠れておいで、怪我をしねえように働 「米友さん、怪我をしないようにして下さいよ、お役人に手向 米友は、鼬を突いた竿を手に取ってその穂先の鋭いところへ、

ると、とっとと表へ飛び出しました。

前はこの戸棚の中に隠れておいで」

さん早くムクを助けてやって下さい」

「よし、それじゃあ、ムクを助けに行ってやろう。玉ちゃん、お

デ竹末ニ編笠ヲ付ケ槍ノ上手故、

其ノ目的ヲ以テ諸参宮人ニ

間の山の巻 を受ける、米友はいま持っていた竿、 客の投げた銭を受け止めるのが商売で、それを「網受け」と申 て客を呼んで銭を乞う。お杉お玉は三味線の撥で客の投げた銭 ドモ浪人ノ身、 京儀ハ他家ノ主人ニ仕フル事、本意ナラズ存ゼラレ候。然レ 住ス。 お杉お玉らは間の山へ出て客を呼ぶ、米友は宇治橋の下に立っ 「織田平ノ信長没落後、家臣鳥屋尾左京ト申ス者、当所ニ来」 傍輩ノ浪人ハ其ノ縁ヲ以テ諸大名ニ奉公ニ出デ、又左

はいばい 渡世ノ送リ様コレ無キヤ、 竿の先の五色の網の袋で 毎日大橋ノ下へ出

九

間の山の巻 した。 例によって、旅に来た浪人から「淡路流」の槍の一手を教えら れたが、三日教えられると直ぐにその秘伝を会得してしまいま 淡路流の槍は穂先が短い、掌で掴むと隠れてしまう。

あります。

まず槍の使い方を習わせられるのを常例とする。

米友はその常

|友の天性は小兵で敏捷。この網受けに割振られるものは、

京の後裔でもなんでもない、

銭ヲ乞ヒ百銭ニ一銭モ受ケ落スト云フコトナシ」

この鳥屋尾左京を網受けの元祖として、米友はその流れを汲

やはり宇治橋の下で網受けをしているけれど、

身分は左

. 同じく拝田村系統のほいとの出で

左の掌で掴んで、右手で槍の七三のあたりを持つと、それで構

穂先を

大菩薩峠

えが出来る、

その構えたところを相手が見ると、槍を構えてい

間の山の巻 受け外すということはないのでありました。それに加うるによ らいだから、宇治橋の下に立って、客の投げる銭を百に一つも う素質とては一日の故ではありませんでした。庭を飛ぶトンボ きに出来ておりました。 い水を泳ぐ。天公はいたずら者で、世間並みでないところへ世 く木登りをする、高いところから飛ぶ、広い間を飛び越える、深 を突く、川を泳ぐ魚を突く、今も鶏を追う鼬を突いた。そのく 米友は槍を学ぶとしては前後にたった三日であるが、槍を扱 この俊敏なる淡路流の槍を遣うべく米友の天性恰好が誂え向

槍であります。

先は掌から飛び出して咽喉元ヘプツリ。実に魔の如き俊敏なる

るとは見えない、棒か竿か? と敵が当惑した瞬間に、短い穂

間並み以上の者を作る、お杉お玉の容貌もそれで、米友の俊敏

豆腐六のうどんは雪のように白くて玉のように太い、それに

間の山の巻 前髪立ちの旅の若い侍――と廻りくどく言うよりは、宇津木兵 は見えませんでした。兵馬は一人でここへ来て、一人でこれか てから、今日はここへ来ているが、七兵衛やお松の姿はここに 馬といった方が前からの読者にはわかりがよいのであります。 ことになる。この豆腐六のうどん屋でうどんを食べていたまだ 宇津木兵馬は、紀州の竜神村で、兄の仇机竜之助の姿を見失っ ここにまた話が変って、古市の町の豆腐六のうどん屋の前の

なる天性もそれであります。

大菩薩峠 間の山の巻 く飛び狂って来る大きな犬があるのであります。 出して見ると、ワッワッと逃げ惑う人畜の向うから、 ワァーッと叫びます。怖いもの見たさの店にいた連中は飛び 疾風の如

「ムクだムクだ、間の山のお玉のムク犬だ」

る。

牛馬が驚いて嘶く、犬が吠えて走る、

鶏が飛んで屋根へ上

「何事だ、

何事だ」

るという騒ぎであります。

「狂犬が出た!」

はそれと知らずにこのうどんを食べていると、表が騒々しい。

店にいたものはみんな表を見る。通りかかった人が逆に逃げ

叱られる」――土地の人にはこう言い囃されている名物。

兵馬

「このうどんを生きているうちに食わなければ、死んで閻魔に

墨のように黒い醤油を十滴ほどかけて食う。

大菩薩峠 間の山の巻 筋の毛が逆さに立って獅子の鬣を見るようでありました。 から挟み打ちにされてしまいました。 ムクは古市の町の左側の大榎のところまで来た時分に、前後 大榎を後ろにしてムクの眼は蛍のように光る。 血を浴びた首

前足を組み違えて、尾をキリキリと捲き上げて、火を吹くよ

岡 引 引 き

「そうれ、逃がすな」

追いかけて来るのが何十人という人、

前には役人連、そのあとから番太、破落戸、弥次馬前には役人連、そのあとから番太、破落戸、弥次馬

得物を持ち、石や瓦を抱えるの

村方の方から驀然にこの古市の町へ走り込んだムクのあとをサックタル

の類が続く。 えている。

「それ狂犬だア、逃げろ!」

追いかけたのとは反対の側から、

また数十人、同じく役人、

番太、破落戸、弥次馬の一連。

間の山の巻 降る。 そうに、ムク犬もこうしていれば、けっきょく狂犬としてここ とのできない囲みの中に立ち迷うていました。 で殺されるよりほかはないのでありましょう。 わんとして狂犬にさせられてしまったのでありました。 「狂犬を打ち殺せ」 「どいた! どいた! どきあがれ」 時に天の一方から、 ムク犬は決して狂犬になったわけではない。主人の危急を救 石や瓦や棒片が、立ち迷うているムクをめがけて雨のように かわい

うな声で、ウォーウォーと唸って、もはやドチラへも切れるこ

大菩薩峠

鉄砲玉のように飛びこんで来た一人の小男、

諸肌脱ぎで竹の

竿に五色の網。

間の山の巻 掻いて逃げ損なっていやあがる、このうえ米友様の御機嫌を損が るとこんなものなんだ、一疋の畜生に何百てえ人間が、吠面あるとこんなものなんだ、一疋の畜生に何百てえ人間が、吠面あ 金剛力士を小さくした形。 にしてしまいやがる、ざまを見やがれ、その温和しいムクが怒 いたこともねえ犬なんだ、それを汝たちが寄ってたかって狂犬 「ムクは温和しい犬なんだ、今まで人を吠えたことも、食いつ 「イヨー米友!」 斉に囃し出すと、米友は網竿を水車のように廻して、 妙な役者が飛び出したと、屋根の上で見物していた弥次馬が

ねたらどうするつもりだ、さあ通せ、道を開いて通せ、ムク様

たんだ、

ムクを殺しやがると承知しねえぞ」

それは米友でありました。

四尺の身体に隆々と瘤が出来て、

「やいやい、ムクは狂犬じゃねえんだ、汝たちが狂犬にしちまっ

大菩薩峠 間の山の巻 遣わせては日本一だ」 体のこなしの敏捷いことと言ったら木鼠のようなもので、槍を と命令する。 を開きやがれ」 いることを見ろ、あれで力のあることが大したものなんだ、身 「あいつは、あの通り小兵だけれども、肉のブリブリと締まって 「通さなけりゃ、こっちにも了簡がある、やい、早くそこの道 米友の手並は事実と誇張とで評判になって、恐怖の騒動の巷 米友は勇気凛々として、竿を打振って行手の群衆に道を開け

はここで一種の興味ある大人気を加えてしまいました。

誰が投げたかヒューと風を切って飛んで来た拳大の

その時、

と米友様のお通りだから道を開いて素直に通せやい」

「イヨー米友、大出来」

間の山の巻

大菩薩峠 の勝手だ、受けるのはこっちのお手の物だ、四尺に足りねえ米 お地蔵様の前からお借り申して来い、

して来て投げてみやがれ、それで足りねえ時は賽の河原へ行っ なきゃあ五十鈴川の河原の石と、宮川の流れの石とをお借り申 町の石でも瓦でもありったけ投げてみやあがれ、それでも足り

投げるのは手前たち

友の身体に汝たちの投げた石ころ一つでも当ったらお眼にかか

投げてみろ、一つ二つとしみったれな投げ方をするな、古市の「石の投銭というのは、鳥屋尾左京以来ねえ図だ、投げるなら

の面を望んで飛んで来た石をすかさずパッと受け留めて、

の鼻面に飛んで来た石をパッと受け返す途端にまた一つ、米友等の網を袋にならぬように強く張った五色の糸。それてムク

「何をしやがる」

間の山の巻 るようにしてハッタと受けて、 ねえぞ」 れが承知だから遠慮なく食いついてやれ、噛み殺してもかまわ ねえようにしろ、後ろからそっと忍んで来る奴があったら、お ヒューヒューと飛んで来る石と瓦が雨霰。 「ムク、お前は俺の後ろに隠れていろ、その榎から背中を見せ 「まだ早いやい、さあ来い!」 大榎とムク犬を後ろにして立った米友。身近に来る石という 竿を立て直すと、それが合図となって前後左右から注文通り、

らあ、さあ投げろ、投げろ」

に締め直すと、ヒューとまた鼻面に飛んで来たのを、鏡でも見

米友は竿の先を手許に繰って、五色の網をキリキリと手丈夫

石、瓦という瓦を、或いは竿を繰延べて前で受け、或いは竿を

間の山の巻 身体だ、飛道具でやられてたまるかい。ムク、こうしちゃあい。 られねえぞ、俺らに続け、合点か」 あったから、 ぎ上げたのは、米友も知っている田丸の町の藤吉という猟師で 体を躍らせて飛び上る。 手許に繰込んで面の前で受け、或いは身を沈めて空を飛ばせ、 友様が食い足りねえとおっしゃる――ナニ、鉄砲だって?」 たら音のするように、当ったら砕けるように投げてみねえ、米 「ふざけちゃあいけねえぜ、米友様だってこれ、生身を持った 「やいやい、もちっと骨身のある投げ方をしやあがれ、ぶっつい 米友は屋根の上を屹と見る。生薬屋の屋根の上へ火縄銃を担めるは屋根の上を眺める。

クに合図をすると、竿の頭から五色の網を払いのける、明晃々

身を沈めて飛び来る石瓦をかわしながら、後ろを振返ってム

間の山の巻 の捕りて。 ワァーッと言って崩れ立つ。 た群衆の頭の上から、人と犬とが一度に落ちて来たのだから、 「ざまあ見やがれ」 「迅い奴だ、鉄砲玉より迅い」 弥次馬は崩れたが、逃げられないのは警護に出向いていた奉行。 米友が飛ぶと、ムクも飛ぶ。一団になって遠捲きにしてい (混みの中へ鉄砲は打ち込めないから手持無沙汰)

「神妙に致せ、手向い致すと罪が重いぞ」

「好きで手向えをするんじゃねえ、汝たちが手向えをするよう

び込んでしまった、その早いこと。生薬屋の屋根の上から覘い

たる淡路流の短い穂先。それを扱いて一文字に、群衆の中へ飛

を定めようとした猟師の藤吉は、

火縄を吹いて呆気に取られ、

間の山の巻 米友とムクが生命がけの曲芸を見てやんやと讃め出してしまい けんために潜り、血路を開かんがために飛ぶ。 槍をグッと手元につめて七寸の位にして遣ってみる、隻手突き て肉へは触らせない、それで寄手の連中がひっくり返る。後ろ に投げ出して八重に遣う。感心なことに、皮一重まで持って行っ へ廻ってはムクがいる。八面応酬して人と犬と一体、鉄砲を避 どちらでも風向きのよい方に傾く屋根の上で見物の弥次馬は、 鉄砲の覘いを乱すために米友は、わざと人の中を割って働く。 - 道をあけて通してくれりゃ文句はねえんだ、やい通しやが

に仕かけるから手向えするんだ、素直に俺らとムクを通してく

を投げつけていた連中が、いつしか米友とムクとの贔屓になっ ました。さいぜんは面白半分に、米友とムクとに向って石や瓦

間の山の巻 ぎよう哉と、いざ笠を被って店を出ようとするその出鼻でこの。
でほな 参宮道が一時は全く途絶えてしまう。豆腐六のうどんを食いさ 騒ぎであるから、足を留めないわけにはゆきませんでした。人 ます大きくなって、古市の町はひっくり返りそうで、さしもの した宇津木兵馬は、 でも仕留めてやろうと覘いをつけては、つけ損う。 の肩越しからその気もなく覗いて見ると、さてもこの有様。 「はて」 生命がけでやる米友の曲芸。ただ見る丈四尺あるやなしの小兵 田丸の町の猟師の藤吉は、 たかが一疋の狂犬に、さりとは仰々しい騒 幾度か鉄砲を取り直してムクだけ 騒ぎはます

て声援をする。

大菩薩峠

集の如し。

の男。竿に仕かけた槍を遣うこと神の如く、魔の如く、電の如の男。竿に仕かけた槍を遣うこと神の如く、魔の如く、電の如く

大菩薩峠 間の山の巻 申し入れます。 える男の傍へ寄って、その持っている槍をお貸し下されたしと 「左様にござる、で、卒爾ながらそのお槍の拝借をお願い致す 「ナニ、貴公があの中へ出向いてみたいと言わるるか」 「御所望致す、そのお手槍をお貸し下されますまいか」(エロホューダ)を持って、我とも知らず人を押し分けて前々兵馬は眼を拭って、我とも知らず人を押し分けて前々 「あの小兵の男、何者とも知らねど槍の扱いぶり至極めずらし 「槍をなんと致される」 役人は兵馬に向って尋ねますと、 暫らく見ていた宇津木兵馬は、山田奉行の役人の下僕とも見 一手応対を致してみたいと存じます」

「ああ、

見事な働き」

我とも知らず人を押し分けて前へ出る。

儀でござる」

間の山の巻 危なくも思い よって拙者が応対をしてみたいとの所望、それを御承知願いた とえ一時たりとも参宮の街道を、 れを待つ方が得策でござる、捨てておかっしゃい」 れは人間業でない奴、うっかり近づくよりは遠巻きに致して疲れば人間業で 「いやいや、 「それは近頃お勇ましいお申し出でござるが、 役人は、 若いに似合わず大胆な言いぶりでしたから、面々は感心もし、 兵馬が小賢しい物の言いようをするとでも思ったのにぎゃ あの勢いではなかなか以て疲れは致しませぬ、 あの狼藉に任せおくは心外、 御覧の通り、

大菩薩峠

「せっかくながら狼藉を取鎮めるは拙者共の役目、

貴公らのお

骨折りには及び申さぬ」

間の山の巻 う思え、俺らは悪人でねえから血を見るのも嫌えだし、見せる りゃあ、 米友の大音。 のもいやなんだが、汝たちがあんまり執念いから、一番、真槍 「やい、やい、いつまでもこうしちゃいられねえ、道をあけなけ 「そうれ来た! 逃げろ」 兵馬の前にいた黒山の人間が浮足立って崩れると、その中で 血を見せるぞ、血の河を流して人の堤を突切るからそ

の突きっぷりを見せてやることになるんだ、さあ来やがれ、今

ŋ_o

うとしたが、人立ちで背伸びをしても中を覗くことができませ

兵馬はぜひなく立って、なお米友とムクとの働きぶりを見よ

「しからば是非もない」

んでした。ただ中でワァーッという声が崩れるように湧くばか

大菩薩峠 間の山の巻 たのではない、抛り出して逃げようとしたのを兵馬が拾い上げ たまでなのでありました。兵馬がその槍を拾い取ると、 「ともかくも、そのお槍をお貸し下さい」 逃げようとした槍持の手から兵馬は手槍を奪い取る、奪い 殺られた」

取っ

「あ、

逃げかかる。

如く逃げ走る。

るこの槍先の田楽串が一本食ってみてえ奴は、

一人も逃しっこはねえぞ、

淡路流の槍に米友様の精分が入って

お辞儀なしに前

へ出ろ、

この猛烈なる悪態で浮足立った人が総崩れになって、奔流の

兵馬に槍を貸すことを謝絶った役人連中までが

それがいやなら道をあけて通しやがれ」

までは米友様の御遠慮でなるべく怪我のねえように扱ってやっ

たんだ、こうなりゃ肉も血も骨も突削るからそう思え、千人に

大菩薩峠 間の山の巻 「待て」 馬鹿野郎、 兵馬の突き出した槍は米友を驚かしました。 そこへスーと手槍を突き出したのが宇津木兵馬でありました。 俺らの前へ槍を出す奴があるか」 *** 米友が何故に驚

いたかといえば、自分の前へ槍を突き出すのは、

餅屋の前へ来

うに槍を突っかけて飛び廻る。ムクもまたそれに続く。

槍創を負って逃げ退くもの数知れず、米友は無人の境を行くよピッルザ

狂いになって真剣に荒れ出されてはたまらない、深傷、

曲芸気取りでやっていてさえ、米友の網竿は恐ろしい、

血を見ると寄手も狂う、米友はなお狂う。一人突くも十人突 米友はついに捕手か弥次馬かを突き伏せてしまったと見える。

は同じ、それで米友は死物狂いになったらしいのであり

大菩薩峠 間の山の巻 「やるな、こん畜生」 後ろへさがって米友は待の形に槍を構え直した。 米 一友はタジタジと後ろへさがった。 兵馬は敵の

が行く。

「や、や、や」

に触ってただ一突きに突き倒す気合で来たのを、中段につけてい。

いのでそれで驚いたのではありませんでした。

「山田の米友の眼中に人はなくなるのだから、

驚いた後は小癪になる。

で驚いたものと見えます。

なにも兵馬の槍先が最初から怖ろし

いた兵馬はスーとそれを引いて、撞木返りに米友の咽喉元へ槍

て餅を売り、川の岸へ来て水を売るのと同じことだから、それ

退いただけ、

それだけ足を進めて槍もそれと合致して進む。

大菩薩峠 間の山の巻 は 人の難儀を見て見のがせなかったためか、ただしは多くの人の 知らず。 もゆかりもないところで、 事を好んで危きに近寄るのは、

見る前で腕を現わしてみたいのか、

いくら兵馬が年が若いから

下げ針を突くの精妙を極めていることも知る人は知るであろう。 後守から、 いる。 な眼の働き。 兵馬の槍は格に入った槍、 ここの見物はそんなことは知らず、米友も無論そんなこと 島田虎之助の門下で、大石進の故智を学んで、 鎌宝蔵院の極意を伝えられていることは知る人もあ 兵馬はそれに驚かず、ジリリジリリと槍をつけて 大和の国三輪大明神の社家植田丹 刀を以て

「それ!」

米友の懸って覘うところは兵馬の眼と鼻の間。

その隼のよう

間の山の巻 心をしたのはそれで、思いがけないところで思いがけない宝を ろ天真流露、 自ら知らずして自ら得ている人に近い。兵馬が感

掘り出したと同じ思いがするのでありました。それを取ること

来て米友の仕業を見れば、まさしくこれは別の世界に驕ってい 堂々たる格法を見習っている人でありました。それが今ここへ

兵

があまりに不思議でありました。

、馬は剣においても槍においても、そのころの大宗師の正々

る人と思わないわけにはゆきませんでした。

驕るにはあらず寧

去って野性横溢、奇妙幻出、なんとも名状することができない

からないのに、その使いぶりときた日には格も法も一切蹂躪し たからでありました。まず手に持っているのが槍だか竿だかわ 友に向ったのは、米友の槍の使いがあまりに奇妙不思議であっ とて、それほど物好きに仕立てられてはいないはず。兵馬が米

馬が一歩進むと米友が一歩退く。 ら取囲むとこれは思いがけぬ槍試合、槍を上段につけたまま兵 た。 が音無しの構え。それにも拘らずここでは思わざる拾い物をし ています。逃げ足の立った見物は、ここでまた引返して四方か 流の備え。ムクはじっと両足を揃えたまま兵馬を睨んで唸っ 米友は猿のような眼をかがやかして、槍を七三の形にして米友 兵馬は槍を上段につけて、米友の咽喉を扼している。

て行く、ムクもそれにつれてジリジリと米友並みにさがる。

一歩一歩と兵馬は追い詰めて行く、米友は一歩一歩とさがっ

ないという心からでした。

兵馬の知ろうとして、まだ知ることのできないのは机竜之助

は明眼の人の義務であって、人のためでもない自分のためでも

間の山の巻 きず、焦れてウォーウォーと叫ぶ。米友の陣立てが悪い時、そ 色は真赤になる。突き出すこともできず、払いのけることもで いたからにしたところで、そこで固まってしまう槍でないこと を知っているムクは、兵馬の槍先がたとえ米友の咽喉へ向いて れを補うのがムクの役目でなければならぬ。それが米友並みに 一足ずつ引いて行ったのではムクらしくもない。気を見ること 米友は猿のような眼をクルクルと廻して、歯を噛みならして、

を知っている。変化の働きを怖るればこそ、同じように引いて

行く。

兵馬は、

彼は窮して槍を投げ出すものと思っているらしい。それだから

いつも上段の位を換えずに極めて少しずつ追い込んで

ただこうして一歩一歩と米友を追いつめてさえおれば、ついに

兵馬に米友を突くつもりのないことはわかっている。兵馬は

間の山の巻 と動き出した。ムクもまたその傍まで来て、兵馬を睨んで唸っ で行けば、米友は勢いこの大榎の幹へ串刺しに縫いつけられる。 より後ろへは一歩も退くことはできぬ。兵馬が前の調子で進ん のところまで来てしまいました。大榎を背中にして米友はこれ ている。絶体絶命と見えた時、 「エヤア」 米友の五体は茹で上げたように真赤になる、筋肉がピリピリ 兵馬は追い詰め、米友は突き詰められて、とうとう前の大榎 この間がなかなか長い、見物は静まり返って手に汗を握る。

なんとも名状すべからざる奇声を立てて米友の竿は兵馬の面

行くのではあるまいか。或いはまた、兵馬に米友を突くの心な

しと見て取って、ワザと後れているのではあるまいか。

しかしながら米友は脂汗を流して、いよいよ追い詰められる。

間の山の巻 槍を手元に引いてしまいました。 たらしい。米友の竿を撥ね返した兵馬は、その槍で直接附け入ったらしい。 て咽喉元をグサと貫く手順であったが、それがそういかないで、 「やいやい、 「エエしまった!」 大榎に串刺しに縫いつけらるべきはずの米友がそこにはいな 米友の突き出す槍を兵馬は下からすくうて撥ね返してしまっ 手前はエライ奴だ、宇治山田の米友の竿を撥ね落 大榎の上の枝の間から声がする。

車のように宙天に飛び上る。

上に向って飛び出した。と思うと、竿は米友の手から離れて矢

今日は綺麗に負けて逃げてやらあ、だがな、おい、役人、町の す奴は日本に二人とはあるめえ、その腕に惚れたから、米友が

やつら、ムクを殺すと承知しねえぞ、ムクを殺すようなことが

大菩薩峠 間の山の巻 た身の軽いこと。

「いけねえ、いけねえ」

飛んで米友様がお逃げあそばすのだ、弥次馬どきやがれ」

屋根にいた弥次馬連はこの声を聞いて、屋根から転び落つる

ほどに驚いて逃げ走りました。

米友は榎から屋根、屋根から屋根、瞬く間に姿を隠してしまっ

だと思ったらムクを放してやれ、いいか、それ屋根から屋根へ

ても大神宮様に申しわけがあるめえ、火をつけられるのがいや

そう思え、宇治と山田の町へ火をつけたら、手前たちはよくっ あれば、この米友が宇治と山田の町へ火をつけて焼き払うから

間の山の巻 られちゃった」 「誰かにあれを取られたの」 「ばかばかしいやい、宇治山田の米友が商売物の竿を召し上げ 「友さん、竿をどうしたの」

「どこと言って俺にも当はねえ、山の方へ逃げてみよう」

「どこへ逃げましょうね」

「そんなことはどうでもいい、早く逃げなくちゃいけねえ、玉

へ逃げ込んで、大勢に囲まれているんだ、ムクのことも心配だ

お前と俺らもこうしちゃあいられねえ」

「ううん、殺されやあしねえけれど助からなかった、古市の町

「ムクは殺されてしまって?」

戸棚に隠れていたお玉が出て、

米友は茹でたようになって、隠ヶ岡のわが荒家へ帰って来る。

間の山の巻 ここに有合せものの栗でも薯でもお米でも、みんなこの袋へ入 げ込めば山ん中で当分かくれて里へは出られねえんだ、だから けるだけ歩きますよ」 をしなさんな」 れて俺らが担いで行くよ」 と二度とふたたび、この土地へ足を踏ん込めねえんだ、山へ逃 「でも、こんな大きな姿をして負さってはきまりが悪いから、歩 「そうしましょう、それにしてもわたしはムクのことが心配に 「きまりが悪いどころの話じゃねえ、お前と俺はここを逃げる 「歩けるたって世話が焼けていけねえ、引担いで行くから遠慮 「わたしだって歩けますよ」

ちゃん、俺の背中へ乗っかりねえ」

なる」

間の山の巻 逃げ出したり助けに行ったり、泣きごとを言ったり啖呵を切っ じことで、地震、雷、火事の場合と同じように、当面のことだ またもとよりそれがわからない。おたがいにわからない同士で たりしている。彼等にとっては人間の出来事も偶然の天災も同 の故にして自分が召捕りに来られたのだかわからない。米友も

け逃げたり避けたり反抗したりしていればよいつもりでいるの

「ほんとにそうだといいけれど」 「そうに違えねえ」 これらの連中の頭は実に単純を極めておりました。お玉は何

らなあ」

らもムクを殺しはしめえ、生きていりゃあ、ムクのことだから、

「心配しなさんな、俺らが町のやつらを嚇しといたから、やつ

山ん中にいようと谷底に隠れていようと、あとを尋ねて来るか

大菩薩峠 川口というところから中の郷へ来かかった時分でありました。

「それもそうだね、友さんのよいようにして下さい。けれども

間の山の巻 なもんだ、役人だって、それまで追いかけちゃ来られねえんだ」 浜辺へ出るからな、その浜辺から船へ乗って逃げようじゃねえ 用品を詰め込んで肩にかけて飛び出しました。 か、船へ乗っちまえばお前、熊野へ行こうと宮へ行こうと勝手 れからずっと南へ行って野見坂峠というのを越すと鵜倉という 「玉ちゃん、俺らは考えたがな、山へ逃げ込むよりもだな、こ 米友がこう言い出したのは、宮川をズンズンさかのぼって、

米友もまた笠を被って人目を隠し、袋へはあり合せた食料や日

お玉には笠を被せて、身なりもなるべくお玉でないようにし、

でした。

間の山の巻 だ、あの犬は人に殺される気遣えはねえとこう思ってるんだ」 クとしておいて、その浜辺とやらへ早く逃げましょうよ」 「わたしもなんだか、そう思えて仕方がないの、いつもムクが 「それがよかろう、俺らはムクのことは大丈夫だと思ってるん

「それだってお前、危ないさ。仕方がないからムクのことはム

「ナニ、隠れて行きゃあ大丈夫だ」

「それは危ないよ」

いなけりゃあモット淋しいんだが、今度はそんなに淋しいとは

たん浜辺へ着いてから、お前を隠しておいて俺らはまた引返し

「それもそうだな……よしよし、それじゃどっちにしろ、いっ

て、もう一ぺんムクを尋ねに行って来らあ」

いか」

ね友さん、舟へ乗っちまってはムクが尋ねて来られないじゃな

間の山の巻 を背負ってやるわけにもゆきません。 「やあ橋がこわれてやがる。何だ、出逢橋だって。洒落た名前

ていました。所帯道具を背負っているために、米友は今更お玉

たしかに六七里は来ているから、お玉の足ではかなり草臥れ

ちゃん草臥れたろう、もう一息だ、我慢しな」

それから明日の朝、

野見坂峠を越して鵜倉へ出るんだ。玉

「なあに、そんなに草臥れやしませんよ」

どこか今夜はひとつ山神の祠でもお借り申して一晩泊めてもらっ

「まあ、なんにしてもここまで無事に来りゃあもう占めたもの、

思わないから、きっとムクは無事なんだよ、それでわたしは安

心している」

出逢橋がこわれて縁切橋なんぞは気が利かねえ。飛んじ

まえ。

玉ちゃんお前、飛べるかえ。飛べなきゃあ、どっかから

間の山の巻 飛び損ねてしまいました。 「あれ――」 「飛べますよ、このくらいのところ、 「ソレ、だから言わねえこっちゃあねえ」 米友は喫驚して小川に陥ったお玉の手を取る。 米友が気づかっているのを無頓着に飛びは飛んだが、 距離は一間ぐらいしかないのだから、お玉も何の気なしに、 わたしだって」 川は小さな流 見事に

荷物をそこへ下ろしているとお玉は、

丸太を探し出して橋をかけてやるがどうだい」

米友は軽々とそのこわれた板橋の間を飛び越えてしまって、

大菩薩峠

れだけれども、相当の深さでありました。

そういう場合における米友は注文より以上に敏捷っこいので、

間の山の巻 向う脛を少し摺り剥いたね、痛いかえ」 ねえ旅なんだから、山ん中へ入ろう、まだ泊るには早いけれど、 「これじゃあ道中ができねえ、そうかと言って人の家へは寄れ 「痛かあありません」

どこかでその着物を乾かすところを探さなくっちゃあな」

が急いているもんだから」

「ふだんならこのくらいのところは何でもないけれど、

今は気

「まあ、仕方がねえ。これビショ濡れだ、

上着も帯も。それに

早いか直ぐに腕を取って引き上げてしまいました。

て来て橋を架けてやるものを、気の短けえことったら」

米友は小言を言いながらお玉を引き上げていると、

「だから言わねえこっちゃあねえ、待っていりゃあ丸太を持っ

女を水物にしてしまうようなことはなく、お玉がおっこちるが、

大菩薩峠 間の山の巻 友はそこを見出して自分が先に荷物を卸して、 いる。 木も動かぬ、 山ふところを分けて獅子ヶ鼻の山の下へ出ました。 てみたら、いいところがあるかも知れねえ」 「エエと、あの高えのが獅子ヶ鼻という山だ、あの山の蔭へ行っ 「玉ちゃん、さあ着物を脱ぎねえ」 「行きましょう、人が来るといけないから早く」 二人はなお南へ行こうとした道を曲げて、西の方へ道のない 大きな樅の木の下、岩角が自然と洞になっているところ、米 四方を見れば寂然として深谷の中にある思い、風もないから 日の光が、照すのでなく覗くようにとろりとして

「そうだねえ」

「ここなら誂え向き、その木と木の間へいま梁をこしらえるか

大菩薩峠 間の山の巻 「裸になるのはいやだねえ」 「襦袢まで脱げば裸になってしまうじゃないか」 「なら襦袢まで脱いだらよかろう」 「襦袢まで湿ってるんだよ」「何だい」 「裸だって仕方が無え」

「いやだって、その濡れた着物を着ちゃあいられめえ」

が屋根にならあ」

「米友さん」

お玉は解きかけながら、

「さあ、

干場が出来たから着物を脱ぎねえ」

ら、そこへ着物をかけて乾かしておけば、着物の乾く間、それ

立枯の木をへし折って、それを蔓で結えて干場を拵える。たちがれ

大菩薩峠 間の山の巻 ないか」 くして、 「誰もいないったって、恥かしいわ。それにお前も見ているじゃ 「俺らが見ていたって……」 「恥かしい?」 「恥かしいったって、誰もいやしねえじゃねえか」 米友は四方を見廻した面をお玉の面へ持って行くと、 そう言って四方を見廻したが森閑たる谷の中。 お玉は、 はにかんで面を赤くする。 米友は猿のような眼を円

「うん、なるほど、

お前が裸になるのがいやなら、俺らが先に

「それだってお前」

「何だい」

「恥かしいねえ」

大菩薩峠 間の山の巻 らいなもんだ」 んぞはちっとも恥かしいとは思わねえ、裸の方がいい心持なく くめえ」 「そうしてやらあ」 「それじゃあ済まないけれど、そうしておくれ」 「お前は裸になるのが恥かしいというじゃねえか、俺らは裸な 「それでもお前を裸にしちゃあ気の毒だわ」 「そりゃそうさ、どっちかひとり裸にならなけりゃ納まりがつ 「それではお前が裸になるじゃないか」 「友さん、お前が裸になってどうするの」 「俺らの着物をお前に着せてやろう」

米友は無雑作に帯を解いて、自分の着ていた着物を脱いでク

裸にならあ」

大菩薩峠 間の山の巻 取ります。 を見るような骨格肉附。 じめてその筋肉の美観が現われる。 「火を焚きつけてやろう、火をひとつ」 「ほんとうに友さんの身体は小柄だけれどもよく締まっている 持って来た所帯袋から米友は火打を取り出して、松葉や枯枝 お玉はお愛想を言って、米友の脱いで貸してくれた着物を受 名工の刻んだ四天王の木彫

を掻き集めて焚火をはじめると、

お玉は後ろを向いて帯を解い

小兵の米友の肉の締りかげんはわからないが、着物を脱ぐとはいい。

も裸の方がよろしいのでありました。

。着物を着ていたんでは

ルクルと纏めてお玉に渡します。

なるほど、

米友は自分で裸の方が好きだという通り、

見た目

間の山の巻 ける。 れど、 肩が顕れる。火を吹いていた米友が、 でしまうと下着、その上着だけを米友が手早く取って干場へか 「早く引き上げてもらったから、水の透らないところもあるけ 「風邪でも引くといけねえ」帯にも下締にも水が入って 下着と襦袢とを一緒に脱いで、後向きにお玉の半月のような 米友は猿のような口を尖らして火を吹く。お玉は上着を脱い にも下締にも水が入っている。 帯の間なんぞは、こんなにグチャグチャ」

て上着から脱ぎかける。

大菩薩峠

「調戯つちゃいけないよ」

「何か落ちたよ」

「それ、

何か落っこった」

間の山の巻 が着物を着換えようとしてそこへ取落したものがあったのです。 たそういうことの言える人間でもないのであって、事実、お玉 調戯っているのでもなければ嫌味を言っているのでもない、^^^ 「そこに白いものが落ちてるじゃねえか」 「いやだね」 「それ、そこに」 「およしなさいよ」 「大事なものじゃねえのかい」 白いものと言われて、お玉はハッと気がつきました。米友は お玉は米友が、わざと調戯っているのだと思っています。 お玉は赤くなって、素早く米友の着物を着換えてしまう。

「そんなことを言うもんじゃありませんよ」

「アッ、これは」

間の山の巻 てやろう」 「手紙かい、濡れたんなら、ここで乾かすがいい、火であぶっ 大事そうにお玉は濡れた手紙を取って米友に渡しながら、

-昨晩、備前屋で頼まれた手紙、懐ろへ入れたまんまで今まで

「申しわけがない、こんなに濡らしちまって」 この時、米友の焚きつけた火はよく燃え上る。

ばその手紙、同じようにグッショリと濡れ切っていました。

「これは大切なもの、今まですっかり忘れていた」

お玉は、

あわててそれを拾い取って、

かけて置きっぱなしで逃げて来たが、手紙だけは懐ろへ入れて

いたのを、この時までちっとも気がつかなかった。落してみれ

屋の裏口で幽霊のような女から頼まれた手紙

――金の方は包み

事に紛れて今まですっかり忘れていたが、これは昨晩、備前

間の山の巻 ように捲いて封じ目を拵えておいてやれ」 の方が乾きが早いや、もうこれカサカサになった、もとの

笠の上の濡れ手紙が乾いたから、米友はそれを捲き直そうと

米友は干場にかけた着物を表は天日で、裏は焚火で両面から乾

の間にお玉は米友の衣裳に着替えてしまって火の傍へ来ると、 れてしまったから、爪の先で拡げて火の傍へ持って来ます。そ 拡げて、遠火であぶるとやらかせ」

被って来た笠の上へ濡れた手紙を置いて、封じ目もなにも離

グショだ、封じ目もなにも離れちゃった、このままでは手がつ

「頼まれ物は大事にしなくちゃあいけねえ。おやおや、グショ

けられねえ。おっと待ったり、いいことがある、この笠の上へ

忘れていました。ああ、お金の方はどうなったかしら」

かすようにしておいて、二人が焚火を囲んで座を占めます。

大菩薩峠 間の山の巻 読んで下さい」 したに」 に千字文、四書五経の素読まで俺らは習っているんだ」 つもねえもんじゃねえか。どれ、読んでみてやろう」 「読めなくってよ、いろはにほへとから源平藤橘、それから三字経「読めなくってよ、いろはにほへとから源平藤橘、それから三字経 「エート」 「何だって? 「読んで下さい、こんな騒動がなければ早く届けて上げるんで 「それはよかった、それではその手紙は、どこへ届けるのだか 「友さん、お前は字が読めたねえ」 米友は仔細らしい面をしてその手紙の表を見て、 米友は少しく得意の体。 お前、 届先を聞かねえで手紙を頼まれて来るや

すると、

だ、逆戻りをして、また宇治山田の町を突っ切って、それから ばよかったねえ」 でねえと大湊へは出られねえ」 いいだろうに、さぞ頼み甲斐のない女だと思っているでしょう」 いへん心配そうにして、お金までつけて頼むんだから早い方が 「どうも仕方がねえ、災難だから。こうなってみると、この手紙 「困りましたねえ、急ぎの用なんでしょうか。あの女の方はた 「まあ大湊……それではまるでこことは方角違い、早く届けれ 「そうだな、宇治から大湊までは一息だが、ここからでは大変

兵衛様方小島様まいる――おやおや、この宛先は大湊だよ」

「女文字だね、女にしちゃよく書いてある。なんだ……大湊、与ホホスタムル゚

を届けるのも今日明日というわけにはいかねえし、その預かっ

たお金というやつの行方もわからねえ、ちょうど封じ目も切れ

間の山の巻 文面を見つめました。 て上げなくっちゃあ」 にいつもするように、猿のような眼がクルクルとまわります。 「それでは、中身をひとつ読んでみてやれ」 米友は捲きかけた手紙をクルクルと拡げて、仔細らしい面で 通り眼を通してしまうと米友の面色が変ります。驚いた時

「玉ちゃん、こりゃ大変だぜ、大変な手紙だぜ」

「何だえ、嚇しちゃいけないよ、落着いて読んでお聞かせよ」

ら、わたしの身は少しくらいあぶなくっても、なんとか知らせ

「そうして下さい、その用向によっては、せっかくの頼みだか

場合だから、御免を蒙って用向をひとつ胸に納めておこうじゃ

ていらあ、他人様の手紙の中身を見ちゃあ悪いけれど、こういう

ねえか」

間の山の巻 り遺書なんだね」 なすって下さいましというわけだ」 ら……それから、どう書いてあるのですよ」 まいます、鳥は古巣へ帰れども、行きて帰らぬ死出の旅だとよ」 「わたしは死んでしまいますけれど、あなた様はよく御養生を 「ああ、それではわたしの歌を聞いて死ぬ気になったのか知 「そうだよ、とてもわたしはこの世に望みは無いから死んでし 「遺書?」 「どんな女の方だか俺らは知らねえけんど、この手紙は、

「そのあなた様というのは誰のこと?」

して聞かせるがね、この手紙を書いた女は、もう死んでるよ」

「お前の方が落着かねえんだ、読むと文句がうるせえから話に

「おや、あの女の方が?」

間の山の巻 金を買いで男の病気を癒そうというんだね」 別に書いてねえが、女が勤め奉公に出て、その血の出るような すって、故郷へお帰り下さるように」 その小島というのは、これによって見ると男だね」 れをお届け申しますから、これでどうかできるだけの養生をな 「それでよ、就きましてはここに二十両のお金がございます、こ 「知らなかった知らなかった、それほどのお金だったら、あの晩 「そうだ、これによって見ると、たしかに病気だね、何病とも 「そうすると、向うの人も病気で悩んでいるのですね」 「へえ、そういうこととは知らなかった」

「それがそれ、宛名の、大湊、与兵衛様方小島という人なのよ、

ぱなしにして来たから、もう取返すことはできない」

に届けて上げればよかったものを。二十両のお金、家へ置きっ

間の山の巻 ありません、どうも済みません」 よ、わたしがお手伝いをして殺したようなものだ、申しわけが あるよ」 たしの命は今晩限り、 はこの歌を書いてあらあ、花は散れども春は咲くよ、 「そんなことはねえ、歌をうたう方と死にたくなる方とは別々 へ帰れども、行きて帰らぬ死出の旅、今あの歌が聞えます、あ 「それでだね、お前、終えの方へもってきてよ、それ、 「それではやっぱり、わたしの歌を聞いて死ぬ気になったのだ ` あれを冥土の土産に聞いて行けば心残りはないから、わ はじめに行基菩薩というお方がおつくりなすった歌だ 明日は、もうこの世の人でないと書いて 鳥は古巣 お前がお、

お玉は躍起となって口惜しがります。

だからあやまらなくてもいい。それで終いの方へ行って、わた

間の山の巻 れません」 「そうだなあ」 十 二

行ってその小島さんとやらにお詫びをするわ、こうしちゃいら

はどうなってもかまわない、友さん、わたしは大湊まで行くわ、

「そう聞いては、わたしはじっとしていられない、わたしの身

ある、筆もなかなか見事だし、文言もうめえものだ」

すけれど、何事もこれまでの定まる縁……こんなことも書いて

がひとりもないと思うと、冥路のさわりのような心地も致しま

でもいますけれど、この世に残るあなた様にはお頼りなさる人 しは快くあの世へ行きます。あの世へ行けば知った人はいくら

大菩薩峠

間の山の巻 た。 こえるくらいのものでありました。 では雌波の音一つ立たないで、 「困ったことだわい」 「何とかしなくっちゃあ」 印伝革のかますから煙草を詰め替える与兵衛は船大工の親方、 伊勢の海は昼でさえも静かなものであります。 ひとりで呟いている。 阿漕ヶ浦で鳴く千鳥が遠音に聞 夜になったの

大菩薩峠

「今晩は」

裏口でおとなう声。

年はとっているが眼は光る。

大菩薩峠 間の山の巻 「あの、 「備前屋さんから?」 「古市から? 古市のどちら様からおいでなすった」 「どうも女衆の声のようだが」 「古市から?」 「古市から参りましたが」 「与兵衛はうちだが、お前さんは」 「あの、大湊の与兵衛さんとおっしゃるのはこちら様で……」 与兵衛はこの時ようやく立って、 与兵衛は立たないで耳を傾けて、 備前屋から」

内で与兵衛が返事。

戸をあけると、手拭で面を包んだ女、逃げ込むようにして家

大菩薩峠 間の山の巻 うか」 手紙を内緒で頼まれて参りました」 その火の傍で少しの間、待っていておくんなさいまし」 「それは御苦労様でございます、どうか少しお待ちなすって。 「これが……」 「これがそのお手紙でございますが」 「ああ、そうでござんしたか」 「その小島さんというお方がいらっしゃるならば、その方へお 「小島……してお前さんは何しにおいでなすった」 与兵衛はお玉の手から手紙を受取って、

与兵衛はその手紙を持って、家の内と外とを気遣うように見

の中へ入って、

「こちら様に小島さんとおっしゃるお方がおいででございましょ

間の山の巻 老爺の帰るのを一人で待たされていました。焚火の光で、丸太*** 光の届かない家の四隅は真暗で、外で千鳥の啼く声が淋しい。 を組み渡した高い天井が白い蛇の這っているように見えました。 お玉はホッと息をつきました。 であります。 「いやどうも、お待遠さま」 ようやくに裏口の戸をあけて与兵衛の帰って来たのを見て、 玉は仕事場の中へ入って炉の傍へ寄って、いま出て行った

廻して、戸を締め切ってしまいました。

被っていた手拭を取って火の傍へ寄った女は、。

間の山のお玉

大菩薩峠

与兵衛は今になって、それがお玉であることに気がついたの

お前さんは間の山のお玉さんじゃねえか」

「おや、

大菩薩峠 間の山の巻 「ええ」 「山の方へ隠れていましたけれど、あのお手紙をお届けしない 「どこに隠れていたんだい」 「隠れて参りました」 「そうして、ここへどうして来なすった」 「どう致しまして、間違いでございます」 「何か悪いことをしたのかい」 「こりゃ、お見外れ申したというものだ」 「お前はお尋ね者になっているはずだな」 与兵衛は、しげしげとお玉を見て、 お玉は恥かしそう。

「ええ、そうでございます」

うちは気が済みませんから、一生懸命でここまで戻って参りま

間の山の巻 たかい」 まってもかまいませんつもりで」 突き抜けて、よくこれまでやって来られたなあ」 わけだね」 てこの船着へ来て、夜になって忍んでここへやって来たという 「よく届けておくんなすった。それで、米友も一緒に来てくれ 「左様でございます、もうお手紙をお届け申しさえすれば、 「舟の中へ? それじゃなにかえ、宮川を下る筏舟の中へ隠れ 「はい、こちら様へ参る材木の舟の中へ隠れて参りました」 「ええ、そこまで一緒に来てくれましたけれど、ムクを尋ねる

米友を探すんで網の目のように筋が張ってあるはずだ、それを

「そうかい、それは御苦労だったな。しかしこのごろはお前と

大菩薩峠 間の山の巻 を狼の中へ入れてやるようなものだ、待っておいで」 ぜひそのお詫びをしなければなりませんが」 ですから……どうか御免なすって下さい」 かり申したんですけれど、それを失くしてしまいましたから、 「それでも」 「まあ待ちねえ、これからお前を一足でも外へ出すのは、 「それでは親方さん、これで御免を蒙りまする」 「どうも仕方がねえ」 「ほんとうに済みません、そんな場合でわたしの身が危ないの 「うむ、そのことは大概わかってる」 「それから親方さん、わたしあの手紙に附いているお金をお預 「米友が古市へ行った? そいつは危ねえ」

と言って古市へ忍んで行きました」

間の山の巻 前に会いてえとこういうのだ」 くわけをお話し申してお詫びを致しましょう」 て出ました。 て上げてくれ、今おれが案内してやる」 はその、お前が持って来てくれた手紙を受取った御当人が、お 「ばかなことを言いなさるな。それから、まだ用があるのだ、 「向うでも聞きてえことがおありなさるようだから会って行っ 「そうでござんすか、それではお眼にかかって、わたしからよ 「もう捕まってもかまいません」 与兵衛は、また裏口から立って、仕事場の外へとお玉を導い

仕事場の外は暗いが、右手の方の海は明るく見えます。

米友は盗賊の罪に落ちている」

「何とかして上げる。今もそれお触れが出たところで、お前と

間の山の巻 大菩薩峠 を、与兵衛に手を引っぱられて行くお玉は気味が悪くてなりま はよく聞えなかったから、返事をしないで黙って歩くこと暫し、 「さあ、ここへ入るのだ」 「お玉、お前まあ、よく会って話をしてみるがいい」 「手を引いてやる、暗いから用心をして来さっしゃい 船をこわした古い材木と、削りぱなしの材木との累々たる間 お玉を入れると直ちに与兵衛は戸を立て切ってしまいました。 海の風が神前浜の方から吹いて来て与兵衛の声を消す。お玉 入江に近い大きな材木小屋。

れているようになっていました。

阿漕ヶ浦と、明るくて光る二見ヶ浦が、大湊の島で二つに分

大湊の海は阿漕ヶ浦には遠く、二見ヶ浦には近い。静かで蒼霧

せんでした。もし相手が与兵衛でなかったならば、お玉は一歩

間の山の巻 ようになっていて、下からは塩気を帯びた風が吹き上げて来る 何の義理があるか、それらもまたお玉にはわかりませんでした。 お方でございますか」 て来たんだ」 いるんだ、誰にも知られてはならないが、お前は別だから連れ 「あの、 「お玉さん、退引ならねえ行きがかりで、俺もその人を匿って 「男の方だよ」 与兵衛がこれほどに匿い立てをするその人は、いかなる人で、 い中を暫らく行くと、石段があって下へ下へと降りて行く なんでございますか、男のお方でございますか、女の

も中へ進み得なかったであろうと思われます。

ようでありました。

大湊は神代からの因縁のある古い古い船着であります。この大湊は神代からの因縁のある古い古い船着であります。この

大菩薩峠 間の山の巻 げ出したくなりました。 せられて、どうやら材木小屋の下を潜って深い穴蔵の中へ引張 気でむしむしと鼻を撲つのでありました。 になってしまい、 り込まれて行くように思われてきました。 「ああ怖い」 意地にも我慢にも、引かれて行く与兵衛の手を振り切って逃 お玉はここまで引張られて来ると、何とも言えないいやな気 磯に沿うた崖と、小屋の支えになった乱杭の間の細道を歩か

「ずいぶん怖いところですねえ」

お玉は慄えながら、

小屋なども百年を数える古い建前であって、

磯の香りや木の臭

大菩薩峠 間の山の巻 した。 くて、 なりに広い一間。 「誰か後をついて来るような足音がします」 「そんなことがあるものか、さあここだ」 「こんなところでなければ人は隠せない」 その中に朦朧として人が一人います。 今、与兵衛の扉をあける音で気がつくと、パッと燈火の光、か お玉の怖いというのは、ただ場所柄が怖いというだけではな 与兵衛は、ずんずんとお玉の手を引いて行く。 なんだかしんしんといやな気持になってゆくのでありま

十三

大菩薩峠 間の山の巻 ます。 人が今、巾でもって面の一部分を洗っているのであることを知っ えて、面は更に見えませんでした。 たのは、やっと中へ入っていっそう気を鎮めた後のことであり 「それは御苦労」 「小島様、 その声だけで、なんとなくお玉は胸へ氷を当てられたように 俯向いている下に耳盥が一つあって、俯向いているのはその。 句、 地獄から引いて来るような声。 お使の衆を連れて参りました」

て俯向きになっていたから、蓬々と生えた月代だけが正面に見 お玉の眼に映じたものは、その人が水色無地の着物を着て、坐っ

微かな燈火の光に朦朧として人が一人います。恐怖のうちにタザーーピルルル

感ずるのです。

間の山の巻 盥へ、黒い巾を浸しては、しきりに眼のところへ持って行って、 それを今ここへ来て見て、はじめてそう感づいたのでありまし 読んでもらって、手紙を受取る人が病人であろうとの暗示は得 そこを叩いているのでありました。 ていると思うたのは眼を洗っているのでありました。真鍮の耳ていると思うたのは眼を洗っているのでありました。真鍮の耳 ていましたけれど、眼が悪いのだとは気がつきませんでした。 で、俯向いた人の方を盗むようにして見ると、面の一部分を洗っ ああ、この人は眼が悪い。 お玉は直ぐに、そう感づいてしまいました。米友から手紙を

お玉は何とも挨拶のしようがないからそこに腰をかけたまま

「それでは、ゆっくりお話しなさいまし。お玉坊、ここは誰も来

間の山の巻 緒に、どうして置放しにされていられるものか、 んとして怖くてたまらないところへ、見も知りもしない人と一 扉をハタと締め切って、自分だけさっさと出て行ってしまいま 「ああ、わたしは帰りましょう、外へ出てしまいましょう」 「何も怖がることはないというのに」 「親方さん、一緒にいて下さい」 与兵衛はかえってお玉の縋るのを突き放すように先へ出て、 お玉は与兵衛に縋りつきたいと思いました。たださえしんし

お玉は取付く島がない。やっと落着いてみれば、悪気でここ

お金を失くしたお詫びを申し上げるがいい、わしは家へ帰って、 る人もなし聞く人もないから心配をしずに、よくお話し申して、

いいかげんの時分に迎えに来るから」

間の山の巻 大菩薩峠 が燈火を受けて蝋のように冷たく光る。 お上りなさい」 ちにふいとお玉の眼に触れたものは、敷物の傍に置かれた大小 うちにもまたそこへ腰をかけてしまいました。 に混乱しきった心持になっていると、 ということを知って、いっそう心細いような、心強いような、妙 の腰の物でありました。それで、お玉はこの人がお武家である 「お豊から手紙を持って来てくれたのはお前さんか、こっちへ 知れない人は、まだ俯向いて眼を洗っていましたが、そのう ようやく面を上げた人を見ると、痩せた身体に蒼白い面の色

お玉は知らない。これは机竜之助でありました。

にも自分を取って食おうというのでもないのだから、怖ろしい へ連れて来る与兵衛親方ではないし、ここにいる人だって、な 大菩薩峠 間の山の巻 思いをしようとは思いませんでした。 来たし、読めと言われたこともないのに、ここへ来て恥かしい ひとつ、拙者に読んで聞かしてもらいたいが」 「拙者はこの通り目が不自由でな、せっかく手紙を届けてもらっ 「はい、あの……」 竜之助は、お玉が遠慮をしているものとでも思ったのか、 竜之助は手さぐりにして燭台を少し動かしました。 お玉には手紙が読めないのでした。今まで読めないで通って こう言われてお玉は、ハッと耳まで赤くなったのです。

「とにかく、こっちへ上って、まことに済まないがこの手紙を

「どうもまことに申しわけのないことを致しました」

お玉はお詫言から先です。

てもそれを読むことができない、どうぞここで代って読んでみ

```
間の山の巻
大菩薩峠
               ませぬ、
                                                                         ございまして」
                                                  「はい」
    「ははあ、
                           「いいえ、
                                      「それはそれは」
                                                              「そなたも目が不自由……」
                                                                                     「せっかくでございますが、
                                                                                                 お玉は困ってしまい、
                お恥かしゅうございます」
   なるほど」
                           目は見えるのでございますが、
                                                                                     あの、わたしも目が不自由なので
                           字を読むことができ
```

竜之助の面に、やや気の毒そうな苦笑い。

て下さい」

静かな声で折返して頼む。 あの……」

ヮは

```
大菩薩峠
                              間の山の巻
                                                                                                                                             を知らぬことの恥辱を感じたのでありました。
                                                                                かれて参りました」
                                                                                                               上を話してもらいたい」
                                                                                                 「はい、この間の晩、
                                                                                                                              「それでは手紙は後のこと、この手紙を届けてくれた女の身の
                                   「大楼とは?」
                                                   「それはあの、大楼でございます」
                                                                  「備前屋というのは?」
                     「遊女屋」
                                                                                                古市の備前屋という家へ、わたくしが招
```

「さてさて、二人揃うて一つの目が明かぬとは……」

お玉は真赤になってしまって、今宵という今宵、はじめて字

「そこへ招ばれて参りまして、その帰りにこのお手紙を頼まれ

「遊女屋-

-なるほど」

間の山の巻 大菩薩峠 に、 紙の上書にあるところへ届けてくれと申しました故、 賤しい女でございまする、歌をうたいに招ばれましてその帰り は何の気もなくお請合いを致しました」 お手紙と、それから一包みのお金とをわたしに渡して、この手 「はい、わたくしは、間の山へ出ておりまする玉と申しまして、 「あの、歌をうたいに」 「歌をうたいに?」 お玉は、あの晩の筋を一通り繰返して、 あの家の裏口から、不意に女の方がおいでになって、この わたくし

「そうして翌日は、早速お届けを致しましょうと思っていると

れました」

たのでございます」

「その備前屋というのへそなたが招ばれて……何のために招ば

間の山の巻 せんでした。 ば、御用向も伺いませんで」 遊女屋――女――金、その次に来るものは――この手紙の中 お玉の話だけでは、決して竜之助を満足させることはできま

でございますから、どうぞ御免あそばして下さいまし」

お玉はお詫びの心のみが先に立つのでありました。

「ただ、それだけの御縁でございます、お名前も承わりませね

のを、後で気がついたようなわけでございます。そういうわけ かくのお金も打捨っておいて、お手紙だけは懐へ入れておいた にわたしを召捕ってしまおうとなさるから逃げ出して、逃げ歩 ころへ、どうしたわけだか知りませんが、お役人が来て、無理

いて、やっとこちらへ参ったのでございまする、それ故、せっ

にその消息が言い込められてあるはず。四つの目があって一つ

間の山の巻 手紙の中をもう拝見してしまったのでございます」 もどかしさに堪えざらしめたので、 「誰に」 「はい」 「この手紙を、そなたは読んでしまわれたのか」 「余儀ないわけで……途中で水の中へそのお手紙を落したもの 「人に読んでもらいましたので」 「目の不自由なというそなたが」 「それから、あの、 燈火の穂先が慄える。お玉は罪を詰られるような心地がして、 重々申しわけがございませんが、 実はその

の用をもなさぬこの場の有様は、やっぱりお玉をして恥じ且つ

時に懇意な人に読んでいただきました、その人は内緒を人に洩

ですから、それを乾かす時に、つい封じ目が切れまして、その

大菩薩峠 間の山の巻 ませぬ」 心持になってしまったのです。 手紙を見てしまったことが、今までお玉の良心に大へんな重荷 であったのを、こうして打明けてしまえば、その重荷を卸した 「はい」 「でございますけれども、あなた様、 「よろしゅうございます」 「では、その筋を話してもらいたい」 「それでは、この手紙の用向は委細のみこんでいるな」 お玉は唾を呑んで念を押すと、 お玉は、ここでようやく度胸が据わって、大事の大事の人の お驚きあそばしてはいけ

「驚きはせん」

らすような人ではございませんから、どうぞ御勘弁あそばして」

間の山の巻 私へお頼みなすったあとで自害をなさったのでございます。 せんでした。 のお身の上が心配と記してあるそうでございます」 んで行くわたしは定まる縁でありますが、生きて残るあなた様 るようにとのお心添えなそうにございます」 「おかわいそうに、このお手紙をお書きなすって、お金と一緒に ーそうか」 「はい、それで二十両のお金、あなた様の御病気をお癒しなさ 「遺書に?」 「このお手紙は、あの、遺書になっているそうでございます」 存外に冷やかな響きでしたから、今度はお玉の方が満足しま

お玉の口には、頼んだ女の心が乗りうつるかと思われるほど

竜之助は冷たい面の色。

大菩薩峠 間の山の巻 がたかぶって来るのでありました。 か、それとも御兄妹でいらっしゃいますか」 頼みもせぬに死んでくれたというようにも響きましたので、お 感情の動きは微塵も認められないのみか、聞きようによっては、 玉の胸にはむらむらと不満がこみ上げて来ました。 「わたしが悪うございました、わたしが悪いのでございます」 「親類でもないし、 「赤の他人でさえ、こんなにまでなさるのに……」 「あの、このお方は、 竜之助の張合いのないこと、気の毒とか憐れとかいうような お玉は、冷やかな竜之助の態度を見て、反抗的に単純な感情 兄妹でもない、赤の他人じゃ」 あなた様の御親類筋のお方でございます

熱が籠っていたが、

ははあ」

大菩薩峠 間の山の巻 せぬ、 を下して殺したのも同じことでございます」 て死ぬ気になったのでございます、それですから、わたしが手 りませんでした、わたしが歌をうたったばかりに、それを聞い わたしでございます、あの方は自害をなすったのではございま 「お前があの女を殺した?」 「はい、わたしが歌をうたわなければ、あの方は死ぬのではあ 「いいえ、わたしが悪いのでございます、その方を殺したのは お 竜之助は冷々たるもの。 ?玉は熱狂する。 わたしが手にかけて殺したのでございます」

「お前が悪いことはあるまい」

「なんだか、お前の言うことはわからない」

大菩薩峠 間の山の巻 気になったのでございます、このお手紙にもそれが書いてござ まして、それをあの方が離れでお聞きなすって、それから死ぬ の歌をうたった者が殺したとはおかしい。歌うものは勝手に歌 しの歌が遺書の中に書き込んであるのが証拠でございます」 「それは妙な証拠じゃ、歌を聞いて死ぬ気になったからとて、そ 「勝手に死ぬ?」 「玉の極度にのぼった熱狂がこの一語で一時に冷却されて、 死ぬ者は勝手に死ぬ……」 鳥は古巣へ帰れども、行きて帰らぬ死出の旅と、わた

「わからないことはございません、わたしが間の山節をうたい

竜之助は冷淡。

口が利けないほどに唇がふるえましたけれど、それが過ぎると

間の山の巻 どうやらかのお方はお前様のために廓へ身を沈めて、慣れぬ苦界 らお金まで都合して下さるおこころざしは、わたくしなどは他 出まかせに歌もうたいましょうけれど、お死になさる人は決し なるほどわたくしは賤しい歌うたいでございますから、勝手に れが死んで行く時まで、あなた様のことを心配して、 の勤めからこの世を捨てる気になったのでございましょう、そ て酔狂でお死になさるのではございません」 「死ぬ者は勝手に死ぬとは、ようもまあ、そのようなお言葉が…… 「どういうわけか、わたくしなどはちっとも存じませぬけれど、 あの中か

前よりも一層のぼせて、

自分が捕まって殺されてもいいから、この手紙だけはお届けし

で聞いてさえ涙が溢れます、それですから、わたくしは途中で

大菩薩峠 間の山の巻 持って生れなかった人なのか。 は のも涸れ切った人なのか、そうでなければ天性そういうものを ないではなかったのに、この人は、情というものも涙というも れども、人の情に対する感謝の美しい一雫を見たいものと思わ て涙をこぼしてしまいました。 「こんな薄情なお方と知ったら、 神崎沖から押寄せる潮が二見ヶ浦を崩れて、今ここの入江にいるがいます。 なかった」 なにも礼を言われたいために危険を冒して来たのではないけ お玉は口惜しくって口惜しくっ 手紙なんぞを持って来るので

ましたのに……」

玉は情がたかぶって着物の襟を食い裂きました。

なければならないと思いましたのに、そう思ってここまで参り

入って来たらしい。蓑を鳴らすような音が聞えます。

死霊がついている、怖い人、いやな人、呪わしい人、その思いい。 はゾッと水をかけられたようになって、 か腥い風が吹き出して水のように流れる。そうすると、お玉なまだ。

ああこの人には生霊かいきりょう

面の色、水色がかった紋のない着流し、胡坐を組んで、一方を 世の人ではないような気がします。蝋のように冷たく光る白い

いたまま身動きさえしないでいると、その人の身体のどこか

ませんが、こう火影から覗いて見ると、どうもなんとなくこの 腹を立てた様子もないし、腹を立てようとしている様子もあり らと揺れた火影からその人の横顔を見ると、その人はべつだん わりをしてしまったことを悔いるような気になって、今ゆらゆ

がゆらゆらと揺れます。お玉はぶるぶると身震いをしました。

浪の音が、上から落ちて来るように颯と響くと、一穂の燈火

あんまり張りが強くなって、初対面の人を捉まえて薄情呼ば

間の山の巻 うに、お玉は立ち竦んで、 を撫でて、長い刀を引き寄せて、 来るのも来ないのも考えておられずに、お玉は立ちかけますと、 「せっかくお使をしてくれた、なんぞお礼をしたいが、見られ 「何か御用でございますか」 「まあ待ってくれ」 「帰りましょう、お暇を致しましょう」 後ろを振向くと、竜之助は手さぐりにして自分の膝のまわり 竜之助は静かに呼びとめる。 座に堪えられないほど凄くなりましたから、与兵衛が迎えに 魔物に後ろ髪を引き戻されるよ

が一時にこみ上げて、

大菩薩峠

どうかこれを受取ってもらいたい」

る通り貧乏でそのうえ不自由の身じゃ、これがせめてもの寸志、

間の山の巻 りはあるまい」 は知らぬ、下り藤になっているはずだが、それでも差料にさわ それ

「お礼なんぞ、飛んでもないことでございます」

なる感に打たれたのでありました。 「これはあり合せ、そなたの年頃に似合うか似合わぬか、 「まあ、 思いがけないものを出されたから、 この簪をわたくしに……」 お玉は三たびここで奇異

簪でありました。

それを抜き出して手に持ったのは、意外にも一本の銀の平打の 礼とは何かと見ると、刀の下緒の間に挿んであったと覚しく、 薄情な人でも自分にお礼をしようというしおらしい心があるの

お玉は、またもここで奇異なる思いをせねばならぬ、こんな

か知らと思わせられたのでありました。そうして、この中でお

間の山の巻 くて、そうしてかわいそうであります。 てしまったのでありました。そうしてみると、盲目になったこ の薄情な人、杖も柱もなく置かれて行くこの冷たい人が憎らし

「どうも有難うございます」

呼ばわりをして怖い人、いやな人、呪わしい人と一途にムカム

カとしてきたその人の影に、可憐しいものが見え出して来るの

自分にくれようとして差出した人の姿を見ると、今の先、薄情

お玉はそれを受けようとしなかったが、今こうして簪を一本、

からどうというような心ではなく、真底のどこにか人の情の温

でありました。それは物をくれるから好い人に見え、くれない

か味というものがこの冷たい人の血肉の間にも潜んでいて、そ

れが一本の簪を伝うて流れるそのしおらしさがお玉の胸を突い

なんということなしにお玉は歔欷りあげるほどに動かされ

大菩薩峠 間の山の巻 た。 りでありました。 然として燈火に顔をそむけて、お玉の泣くのに任せておきまし 「御免下さいまし」 「別に悲しいこともなかろうものを」 「なにかしら悲しくてなりませぬ」 「なに……何が悲しい」 「泣けてしまいました、つい、 **泣いて泣いて、暫らくは口が利けませんでした。竜之助は冷** お玉は、よよとしてそこへ泣き倒れてしまいました。 ただ所在なげなのは、 その手にもてあました平打の簪ばか 泣けてしまいました」

、悪い駕籠屋からお豊が責められて、そのとき詮方なくお豊竜之助がはじめて京都へ上る時に、同じこの国の鈴鹿峠の下

「泣いているのか」

間の山の巻 竜神からお豊と共に逃れて後、お豊の手から再びわが手に入れ ら十津川までの竜之助はあの通りの竜之助で、饅頭の代りに帯 豊を初めて見た竜之助が、さてもお浜によく似た女と思った後 た物であろうと思われます。思い出の多かるべきはずの竜之助 を今まで持っていたはずはありません。これはおそらくその後、 刀をすら差出してしまった竜之助ですから、あの一本の簪だけ その簪を持って京都まで上って行ったはずであります。 以前の定紋と同じことであった下り藤であったので、竜之助は が駕籠屋に渡そうとした簪がこの簪と同じ物でありました。お いお玉は、その簪のために泣かねばならなくなりました。お玉 茶屋の老爺が拾った平打の簪を見ると、それがまたお浜の その簪に対してはさまでの惜気がなくて、なんらの縁のな 京都か

は泣き、竜之助は泣かせておくと、

またも天上から落ちて来る

間の山の巻 の他、 浦は、 ません。 ろうと、そこから押して来る、それを神崎の潜り島や俎島、そ ように浪の音が蓑を鳴らして湧き立ちました。 風浪険悪の夜は潮鳴りの声が大湊まで来るのは不思議ではあり 見ヶ浦とても決して荒い海ではありませんけれど、二見ヶ浦を 紀州灘や遠州灘で鳴らした波が、伊勢の海の平和を乱してや 足廻って、神崎の鼻へ出ると遽に波が荒くなります。 伊勢の海は静かな海で、ことにこれより北へかけての阿漕ヶ 、その夕凪と朝凪とで名を得た海であります。 水底にかくれた無数の隠れ岩がやらじと遮るのですから、 南へ続く二

大菩薩峠

或いは地の底から来るように、この室には響いて来ることです。

十七姫御が旅に立つ……

ただ不思議なのはその浪が、或いは天上から落つるように、

大菩薩峠 お松でありました。 の上から大湊の陸の方をながめて物思わしげに立っているのは

宮川と汐合川の流れ出したところが長く洲になっていました。

間の山の巻

その前の晩、

大湊へ碇を卸した十六反の船がありました。

う歌に相違ありません。

の底にあるのか、或いは海の岸にあるのか。

十 四

そもそも自分らが今いるこの部屋は、家の奥にあるのか、

地

お玉の耳には聞き洩らすことのできない声、米友の好んでうた

海から来たものであろう、微かに響いて来たのですけれども、

これも不思議、その声がどこから起ったか、浪と一緒だから

間の山の巻 建物が見えています。町は明るいのに船倉と材木場の方は真暗 であるから、ここに泊っている船は、この船とばかりは限らな 往来するのを、お松はそれにいちいち眼をつけていました。 入江の方から帆柱が林のように立っている間をおりおり小舟 大湊は船を造えるところであり、またそれを修理するところ いのであります お松はこうして兵馬の帰りを待っているのでした。兵馬は大 .林の船倉から東の方へ突き出した洲崎には材木場の大きな

神宮へ参拝するといって船を下りたまま、まだ帰らないのです。

した。

大湊の町の町並は点しつらねた人家の灯で丁字形になっていま

それをとびとびに一里半ゆくと、宇治山田の町が灯に明

大菩薩峠 間の山の巻 る 飛んで来る」 ろだと船頭衆が言っていた、あそこから高張が出たのは、いよ いよ只事でないにきまってる」 つ三つ見え出してきたから、 「おや、あそこは船倉じゃないか、 「お祭礼でもないようだし、ああ、 陸を見ていたお松は眼を睜って、 と見ると小林の船倉あたりから、 ;松が気を揉み出した時に、 だんだん大湊の町へ近くな 高張提灯のようなものが二 お奉行様のお邸のあるとこ

「おやおや、宇治山田の方から、

提灯のようなものがたくさん

「おいおい、みんな来て見ろ、

船中の者共は我れ先にと船縁へ出て、そうして町の方を見物

町で何か騒動が始まったぜ」

大菩薩峠 間の山の巻 頭が、 いから」 もう少し待ってみなさるがよかろう」 て上げろ」 「そんなら誰か伝馬を押せやい、 「どうしても行ってみます、あんなに騒がしいのは只事ではな 「よし来た」 「お前さん一人はやれない、行くなら誰かつけてやるが、 「心配だから、 「何だ何だ、火事か盗賊か」 お松はたまり兼ねて、 わたし陸へ上って様子を見て来ます」 船頭の助蔵に向ってこう言いますと船 勝、 お松さんを陸まで連れてっ まあ

水手の勝が威勢よく返事をしました。

お松は伝馬に乗って岸

しながら、

間の山の巻 るようだぞ」 込んだかな」 で用心していたっけ、ことによるとその火つけの悪者でも追い ことだ、山へ逃げ込んだ悪者が火をつけに来るといって、廻状 て来たのだろう」 「なるほど、宇治山田の町ではこのごろ火の用心が厳しいという 「お松さんの舟じゃあるめえな。エーと、宇津木様の舟が帰っ 「待て待て、汐合の水門から伝馬が一艘、無提灯でこっちへ来 「そうかも知れねえ」

「そうだろう」

「材木場を取捲いた提灯が一度に海辺へ出たぞ、海へ何か抛り

て行きました。その後で船頭、親仁、水手、舵手らが、

へ行くために通い口から出直して、伝馬に乗るべく元船を下り

間の山の巻 ろへすうっと漕ぎつけたのでありました。 く漕ぎつけて来た一隻の伝馬は、篝火もなし、提灯もなし、ほ とんど船の人も気がつかないでいるうちに、この船の腹のとこ より海の方がよほど逃げいいから」 「こりゃあ、向う岸の火事で済ましちゃいられなくなりそうだ」 「うむ、俺をお呼びなさるは誰だえ」 「おーい、船頭の助蔵どんはいるかい」 「やれやれ、 この時、早櫓でもって、矢を射るようにこの若山丸の船腹近 御用提灯をつけた舟が二三ばい漕ぎ出したぞ」

こむ音がするようだ」

「海へ逃がしちゃあ、ちっと捕りにくいな、水が利く奴だと陸

大菩薩峠

「おお、与兵衛どんか」「船大工の与兵衛だ」

大菩薩峠 間の山の巻 と見えました。 田の町にもう少し足を止める必要が起ったから帰れぬとのこと。 できませんでした。 「助蔵どん、なんにも言わずに人を預かってもれえてえのだ」 船番の人に言伝があって、帰るつもりであったけれども、 岩まで行って見たけれども、お松はそこで兵馬に会うことが 船へ上って来た与兵衛は、助蔵の耳に口、 Щ

「合点だ、それ梯子を下ろしてあげろ」

船大工の与兵衛老爺とこの船の船頭の助蔵とは、入魂の間柄。

「大急ぎで頼みてえことがある、通してもらいてえ」

戻してもらいました。

それを聞いてお松は安心をして、元船へ帰るべくまた舟を漕ぎ

.田の町を道庵先生が、今お伴を一人つれてのこのこと歩い

間の山の巻 と聞くと、「あ、十八文置いて行きな」と答える、それで十八文 まいが、下谷の長者町へ行って十八文の先生といえば誰にもわ 八文のためには、与八と組打ちまでした騒動があるのでありま の先生、一名、安いお医者さんで有名なのであります。この十 かるのであります。 ています。道庵先生とだけでは、この土地の人にはよくわかる 「先生、お薬礼はいくら差上げたらよろしゅうございましょう」

その道庵先生が一僕を召連れて、ほくほくと伊勢参りなん お松なんぞもこの先生のお蔭で命を取留めたのでありまし 大菩薩峠 間の山の巻 参りに出かけたくなっている矢先へ、ぜひお伴を仰せつけられ 生はこの仙公がお気に入りというわけでもなんでもなく、 たいものでとか何とか言って来たものだから、よし、 が酒臭い息を吹きかけているから天下が泰平なのであります。 てやるというわけで、引張って来たものであります。 つれて来た、 「俺ゃ、そんなところはいやだ」 「そうですな、 「仙公、今夜どこへ泊るべえな」 お伴の仙公は額を叩く。仙公という男は江戸から道庵先生が 道庵はお伴を振返って酒臭い息を吹きかけました。道庵先生 野幇間とまではいかない代物であります。道庵先のだいに 千束屋か牛車楼あたりヘドンナものでげす」 つれてっ 伊勢

道庵先生の駄々。

ぞと洒落込んだのであります。

げすから、百両とか千両とかおっしゃっていただきたいもので さるのがおかしゅうげすな、トテモ江戸っ児の腹を見せるんで 「ばかを言え、俺は十八文の先生だ、勿体なくってそんなに金 「それは頼もしいことで。しかし先生、十両とくぎって奮発な

が使えるか」

首尾よく大失敗をやらかして、みんごと江戸っ児の面へ泥を塗っ

「お嫌いでげすか。先年はあすこで弥次郎兵衛喜多八の両君が、

っぴお伴を致したいものでげす」

いちゃ俺も道庵だ、奮発する、十両も奮発して大いに遊ぶ」

「弥次と喜多が器量を下げたのは、あすこかい。よし、そう聞

が相提携して、その名誉回復なぞはいかがでございますな、ぜ てしまったところでげす、そこでこのたびは道庵先生と仙公と

間の山の巻 「わかりましたよ、わかりましたよ、ああ冷汗が出ちまった」ビ貯めて、それで伊勢参りに来たんだ、十八文がどうした」 八文の先生は俺だ、薬礼を十八文ずつ取って、その金をチビチ ころなのであります。それを道庵先生が十八文十八文というも では、きまりが悪くって」 て山田の町を歩いて行くのであります。 のだから、自分までが安く見られるような気がして、弱りきっ 「ナニきまりの悪いことがあるものか、盗みも隠しもしねえ、十 「困りましたな、先生、そう十八文十八文とおっしゃられたん 「十八文の先生の、俺は道庵だ……」 仙公としては、これで大いに江戸っ児で納まって行きたいと

道庵先生と仙公とはこうして山田の町を歩いていたが、途中

「これは恐れ入りました」

間の山の巻 すか、弓張に致しますか、それともまた別にお好みでも」 傍に立って、今こんなところで提灯を誂えなくてもよかりそう は店先へ腰をかけてしまいました。仙公も仕方がないからその ぷりのいいやつを」 で道庵先生がふいと一軒の店へ立寄りました。その店は提灯屋。 「ブラがいいね、ブラ提灯のなるだけよくブラブラするブラっ 「こんにちは、提灯を一つこしらえてもらいてえが」 「提灯は、小田原でございますか、ブラでよろしゅうございま 「提灯の安物を一つ」 「へい、おいでなさいまし」 提灯屋は、先生酔ってるなと思っておかしがると、道庵先生

なものをという面をしています。

「仙公や、提灯がなくては何かにつけて不自由だから、ここで

大菩薩峠 間の山の巻 けでよろしゅうござんすか」 致しやしょう」 に入れて差上げます」 いてくんな」 「十八文と入れますんでございますか、ここへ、ただ十八文だ 「また始まった」 「よしよし、それにしよう」 「先生、このブラ提灯のブラ下り具合が乙でげすから、これに 「定紋なんぞ付けるには及ばねえ、そこんところへ十八文と書 「先生の御紋は何でございましたっけね」 「そうして、お印はどう致しましょう」

一つ仕込んで行くのだ、お前、好いのを見立てな」

「いろいろ出来合いがございます、お好みによってお印を即座

大菩薩峠 間の山の巻 ことに致しやしょう」 文」と入れてしまいました。 「それじゃあ先生、こうして畳んで懐中へ忍ばせて持って参る 「驚きましたね」 「さあ、仙公、これをつるして歩け」 「ナニ構わねえ、俺が承知だ」 「先生、 「驚くことはない、 「そうだ、十八文でよいのだ」 簡単な文句ですから、提灯屋は手提のブラ提灯へ早速「十八 仙公は苦り切っている。 およしなすった方がようござんすぜ」 提灯が取って食おうと言やしまいし」

提灯屋はおかしな面をして道庵先生の面を見上げる。

「ばかを言え、こうして吊るして歩くんだ、これから蝋燭屋へ

間の山の巻 け 歩く、日中、 ここでちょうちんもちに出世したんだ。有難く心得て持って歩 歩けるもんですか」 「あんまり味わいもありませんねえ」 「ばかを言え、暗いところを提灯をつけて歩く分にゃ誰だって 「弱ることはねえ、貴様はたいこもちの出来損ないだ、それが 「弱ったなあ」 「ぐずぐず言わずに早く歩け」 提灯を点けて歩くからそこに味わいがあるのだ」

と、しみじみと情けなくなりますなあ」

「先生、提灯はようござんすが、この十八文という文句を見る

行って百目蝋燭の太いのを買ってやる」

「冗談じゃありません、昼日中、提灯をつけて宇治山田の町をじょうだい

きなさる、それは結構なことでございます、そりゃあまあ、そ

れでようございます、ようございますけれども、なにも旅へ出

間の山の巻 「そりゃあね、先生、なるほど先生は薬礼を十八文ときめてお置 道庵先生はプンプン憤っています。

えの、あたじけねえのケチを附けやがって、太え野郎だ」

「打ったがどうした、十八文は俺の看板だ、

その看板を情けね

打ちなさるのは酷うげすな」

仙公は頭を抑えて不平を言う。

「こりゃ驚きましたねえ、なんぼ拙が仙公にしたところで、お

道庵先生は仙公の頭を一つぽかりと食らわせました。

「馬鹿野郎」

「だって先生、十八文じゃあ、あんまりあたじけねえ」

「なんで十八文が情けねえ」

間の山の巻 え……」 「いいえ、なんでもございません。ねえ先生、こうして旅へ出て 「こっちも底が知れねえ……」 「なんだと」

あまり情けねえじゃあござんせんか。いくら旅の恥は掻捨てだ

と申しましても、それじゃあどうも泣きたくなりますなあ」

「馬鹿野郎、ドコまで馬鹿だか、貴様の馬鹿さの底が知れね

えて忍んでおりますといい気になって、提灯へまで十八文と書 あ、それで世間の人は何も知りませんや、そう思って無念を怺

いて、それを昼日中、持って歩けというのは、なんぼなんでも

んか。それもまあようござんす、拙がひとり胸に納めていりゃ

て、拙に冷汗をおかかせなさるには当るまいじゃあございませて、サラー ロネータサー てでございますな、そこでやたらに十八文十八文とおっしゃっ 大菩薩峠 間の山の巻 来れば、先生様は御番料を千俵もいただく御典医で、拙は蔵前 ワザワザ十八文と書いて、暗闇の恥を明るみへ出さずとも……」 の旦那衆というような面をしたって誰も咎める者はござんせん、 へ出した、さあ、それを言ってもらいてえ」 「十八文がどうしたと言うんだ、俺は十八文の医者に違えねえ、 「だって先生、この十八文……」 「暗闇の恥とはなんだ、さあ仙公、いつ俺が暗闇の恥を明るみ 「さあ、また承知ができねえ」 「暗闇の恥を明るみへ出さずとも」 「なんだこの野郎、もう一ぺん言ってみろ」 「そうお怒りなすっちゃ話ができません」

十八文が十八文と言うのがなんで恥だ、さあ、それが聞かして

もらいてえ」

間の山の巻 にやってしまっては実も蓋もありませんね、たとえ十八文にし やがって、承知しねえからそう思え」 「それはそれに違いありませんがね先生、そう物事をアケスケ

たところで、百両百貫のような面をして……」

んだ、それを貴様は情けねえの、あたじけねえの、ケチをつけ

暮らしを立てて、その十八文の中からチビチビ貯めて、それで

「なにも理窟を言うわけじゃねえ、十八文が十八文で、十八文で

「そう理窟をおっしゃっちゃ困ります」

られるし、うまい酒の一杯も飲めようというものだ、その冥利 涙が溢れらあ、十八文のおかげでこうして俺は伊勢参りにも来 伊勢参りに来たんだ、それを思うと十八文様々だ、有難くって

を思えば十八文様に黙っていちゃあ済まねえ、それだから提灯 へおうつし申して御一緒に大神宮様を拝ませようという了簡な

間の山の巻 持って行け、持って行け」 え、お提灯様のおかげだぞ、手前のような野郎でさえそれを持 てば、道庵先生の先へ立って歩ける、さあさあ、有難く心得て 仙公は泣きそうな面をして十八文の提灯を取り上げると、

長しちゃいけねえぞ、手前がエライから先に立てるんじゃあね うな薄っぺらな人間でも大臣大将の先に立って歩けるんだ、増 あるような面をしたり、薄っぺらな奴が厚っぺらの面をしたり、

のはな、学問のねえ奴があるような面をしたり、銭のねえ奴が

「まだわからねえ、この野郎、言って聞かせてやる、恥という

そんな奴が恥といえば恥なんだ、十八文はちっとも恥でねえ」

「さあ持って歩け、ちょうちんもちというやつはな、貴様のよ

「左様ですかねえ」

灯屋の者は腹を抱えて笑いました。

大菩薩峠 間の山の巻 と言って先生は二階を見上げて立ち止まって、 立って、 い気になって山田の町を通って行くと、 「おや」 「こちらに御逗留か」 「やあ妻恋坂の女将軍!」 「先生も御参宮?」 「先生、 道庵先生見上げると、 大きな宿屋の二階から呼び留める声。 仕方がなしに仙公は十八文の提灯をぶら下げ、 こっちを見て笑っていますから、 道庵先生じゃございませんか」 品のい い切髪の美人が欄干のところに 町の中程で、

道庵先生はい

「はいはい」

「お宿は?」

大菩薩峠 間の山の巻 て歩かせるのさ、この野郎は仙公といって……」 て二階の美人に見せました。 「それでもこの野郎が持って歩きたいというから、わざわざ持つ 「みっともないから、そんな物を持って歩くのをおよしなさい」 「こいつも話せねえ」 「十八文! 「はは、これこの通り」 「先生、そりゃ何です、そのお提灯は」 「そりゃ有難い」 「そんなら、ここへお泊りなさい、お相宿を致しましょう」 「宿はまだきまらねえ」 道庵先生は大自慢で、 いやですねえ」 いま買立ての提灯を仙公の手から取っ

「先生、よけいなことを言わなくてもいいじゃありませんか、早

大菩薩峠 間の山の巻 え、おやおや、もうグウグウ鼾をかいている」 た。 来ると、 たまらないから、 「おや、先生、こんなところへ眠ってしまっちゃいけませんね 「あばよ」 「待っていますから、早く行っていらっしゃい」 仙公に担がれるようにして道庵はようやく小田橋のところへ 道庵は二階の美人を振向く。 仙公は女の手前、 橋の袂へ寄っかかって好い気持に寝込んでしまいまし 袖を引っぱって早く連れ出そうとしました。 道庵先生がどんなことを喋り出すか危険で

道を通る人は行倒れではないかと思って覗いて行くから仙公

く行きましょう」

「さあ行こう」

大菩薩峠 二階で見ていた切髪の女、それは伝馬町の旗本神尾の先代の

愛妾お絹であります。

お絹はお松を養って、今の神尾の家へ奉

間の山の巻

して下さい、仙公をかわいそうだと思うなら起きてやって下さ

「先生、こんなところへ寝込んじゃあ困りますねえ、なんとか

「ムニャムニャムニャ」

もし先生」

して怪しいものじゃございません」

仙公は往来の人へしきりに言いわけをして、

はきまりを悪がって、いくら起しても起きようとはしません。

「酔っぱらうといつでもこれなんですからやりきれません、決

大菩薩峠 間の山の巻 うでございます」 すが、それと相棒の米友という奴が大湊の浜で捉まりましたそ てございます」 「へえ、あの一件でございますか、あれはあなた、捉まりまし 「米友というのは、このあいだ竿を振り廻して古市の町を荒し 「いいえ、お玉の方はどこへ逃げたやら行方知れずでございま 「エエ、 捉まった? あの備前屋とやらで賊を働いた女の子が」

た網受けの小さな男だね」

「エエ、そうでございます、それが大湊の浜辺へ海から泳ぎ着い

公に出した妻恋坂のお花のお師匠さんであります。

按摩に肩を揉ませながら、

歯摩さん、

あの間の山のお玉とやらの詮議は、どうなりまし

お

消制は今、

間の山の巻 **「噯にも白状をしないので、お奉行所でもてこずっているそうで** 言うんだね」 ございます」 玉に手引をさせて自分が盗んでいながら、自分の盗んだことは たそうでございます」 「では、その米友という小男は、どうしても自分が盗まないと 「それで、泥棒の罪は白状したのかね」 「左様でございますとも、自分も盗みなんぞをした覚えはない 「ところが、剛情な奴で、お玉の行方も申し上げなければ、お お玉だって決して盗みをするような女ではないと、あべこ

べに啖呵を切ってお役人たちをまくし立てているそうでござい

たところを、隠れていた役人が大勢して、やっとのこと、生捕っ

間の山の巻 うと思っている」 ございますからな」 ません、そうでなければ米友がお玉を隠し廻るはずがないので ございますから。ことによると二人がグルでやったのかも知れ なところにあるべきはずでない二十両というお金もあったんで がありません、お玉の家にお侍衆の印籠もあれば、それにあん は怪しいけれど、わたしはどうも、あの二人の仕事ではなかろ 「大きに……この町でも二通りの説がございまして、お玉や米 「どうもその印籠やお金が女の子の家に転がっていたというの 「なに、それはもう証拠が上っているんでございますから仕方

だろう」

「そうしてみると、ほんとにあの二人が盗ったわけじゃないん

友は決して盗みをするようなやつらではないというものと、で

間の山の巻 神尾の邸へ集まる例の旗本の次男三男のやくざ者が五人、それ というのもそれらの連中でした。お絹の一人だけ後に残った理 にお絹ともに女も三四人まじっていたのでありました。 人で残っているのでありました。その連れというのは、 言っているのと、半々なのでございます」 も証拠が上っている以上はあいつらの仕事かも知れないとこう のはそれらの連中で、そこですっかり持物を盗られてしまった お 備前屋でお玉を呼んで間の山節を聞いた若い侍たちという .絹の伊勢へ来たのは一人ではありませんでしたが、今は一 最初の 番町の

が一つでありましょう。

由としては、この盗難の跡始末を見届けて行きたいということ

按摩が帰ると薄化粧をして、身なりを念入りにととのえた、

ところを折重なって押えられたのだから、めざましい抵抗も試

竿を持たせてこそ米友だけれど、素手で水の中を潜って来た

噂の通り米友は大湊の浜でつかまってしまいました。

言置きをして、

て行きました。

お絹のあだっぽい被布の姿はこの宿屋から出て、酔っぱらいの

お医者様が来たら部屋へ通して酒を飲ませておくように宿へは

自分は直ぐ戻るような面をしてどこへか出かけ

べきことがないから白状しないのを、それを剛情我慢と憎まれ

白状す

間の山の巻

間の山の巻 二つの罪でお仕置を受けることになりました。 利に解釈されて、米友にはいよいよ不利益な証拠になってしま 人をてこずらせてしまいました。 になっている米友は、 隠ヶ岡へ引っぱられて行く道で、 て、それについて弁明すべきお玉がいないのだから、 「米友が来る、米友が来る」 縄がキリキリと肉へ食い込んで、身体の各部分が瓢箪のよう縄がキリキリと肉へ食い込んで、身体の各部分が瓢箪のようた そこで米友は、ついに盗人と、それから町を騒がしたという 「玉の家にあった印籠と二十両の金とがただ一つの証拠となっ

よけいに苛められるものですから、米友は意地になって役

大菩薩峠

へ真黒に人立ちがしました。

宇治山田の町では、縛られて通る米友を見ようとて道の両側

間の山の巻 ものがありました。その旅人は一夜に五十里を飛ぶ怪足の七兵 けて念を入れて米友の姿を見、それに対する評判を聞いている に一人、旅の姿をした男が笠を傾げて、人混みの中からとりわ ひそかに同情を寄せているのもありました。それらの見物の中

を気味悪く思っているのもありました。たぶん冤罪であろうと

引かれて行く米友を見物している町の人々のうちには、それ

すには刃を用いないで、

隠ヶ岡から地獄谷というのへ突き落し

宇治山田の神領では血を見ることを忌むから、

刑罰の人を殺

のであります。

米友はこれから隠ヶ岡というのへ引っぱられ、

お仕置に会う

てしまうのが掟でありました。

衛に相違ありません。

「盗人でございますって?」

大菩薩峠

```
大菩薩峠
                           間の山の巻
                  「左様」
     「ほんとうに、あの男がやったのでございますかね」
                               「あの男が?」
                                             「お侍衆が音頭を見物しておいでになる時に」
                                                          「備前屋で?」
                                                                       「古市の備前屋というので」
                                                                                     「どこでやりました」
                                                                                                  「お侍衆のお金と持物をそっくり」
                                                                                                               「何を盗んだので」
                                                                                                                            「ええ、盗人でございます」
```

「証拠があるんでございます」

そうな見物人の一人をつかまえてこう尋ねました。

七兵衛は自分に最も手近で、そうして最もよく話をしてくれ

```
大菩薩峠
                                          間の山の巻
                か
                                                                                                 「女?」
                                                 「それで女の方は捉まらず、あいつだけが捉まったので」
「剛情者ですから白状しないんでございます、けれども証拠が
                                 「それで、なんでございますか、もう白状したのでございます
                                                                  「へえ、そりゃ……」
                                                                                  「間の山へ出ていたお玉という女」
                                                                                                                    「それは女でございますよ」
                                                                                                                                   「相手というのは?」
                                                                                                                                                     「あいつのほかに相手が一人あるんでございます」
```

「はてな」

「梨子地の印籠に二十両の金」「その証拠というのは?」

```
大菩薩峠
                                 間の山の巻
       が、
                                                        うにして、それで隠ヶ岡から下へ突き落すのでございます」
                                                                                                           ございます」
                                      「は――て」
                                                                         「こちらは御神領でございますからお仕置にも血を見せないよ
                                                                                          「は――て」
                                                                                                                                            「お仕置に?」
                                                                                                                                                             「これからお仕置になるんでございます」
                                                                                                                           「隠ヶ岡というのへ連れて行って、あれから下へ突き落すので
                      七兵衛は過ぎて行く米友の後ろ影を伸び上って見ていました
```

「そいつは困ったことが出来た」

ありますから」

「それで、どうなるんでございます」

大菩薩峠 間の山の巻 んや」 くれますか」 ね、そこは昼もお化けの出る古池で、人間の骨がゾクゾクして 人が出た時には困りましょうなあ」 「へえ」 「山の下までは行けますがね、 「しかし、 「なんですか、その隠ヶ岡のお仕置場というのは誰でも見せて 「それは困りましょうなあ」 山の下を廻って行けば行けないことはござんせんが お仕置場のところへは入れませ

「いえナニ、白状しないものをお仕置にかけて、もし本当の盗

「何でございます」

いますから、とても行かれませんや」

「左様でございますかね」

間の山の巻 もついて行き、 た道を逆に帰って、米友のあとを追うて、見え隠れにどこまで そうですよ」 なことをしてしまったのでしょう、かわいそうといえばかわい 「こいつには困った、まだまだ俺もここいらで年貢を納めたく 「それは気の毒なことをしました、どうも大きに有難う」 「あいつも根は正直者なんですが、ひょいとした出来心であん 七兵衛はこれだけの話を聞いて、なんと思ったか、来かかっ

はねえのだが……」

すが、もうこうなってはお取上げになりますまいよ」

「左様でございますかね」

て、あの男の命乞いをするといって騒いでいるそうでございま

「それからその隠ヶ岡の下では、拝田村の芸人がたくさん集まっ

間の山の巻 棒を拾って一打ちと振りかぶると、犬はその手へスーッと飛ん で来ました。あぶない、その手を渡って来て肩先へ噛みついた 「叱ッ、叱ッ」 「叱ッ、叱ッ」 七兵衛は先を急ぐことがあるのであります。落ちていた竹の 石を拾って打とうとするとその手許へ犬が飛んで来ます。 ムク犬は、どこをどうして来たか、ゲッソリと痩せていまし 猛犬はやはり猛犬でありました。 飛びかかる足許さえ危ないくらいに痩せていましたけれど

へは透らないで、七兵衛の合羽の上を食い破ってしまいました。 ――七兵衛が少しく身をかわしたから、ムクの歯は七兵衛の肉 が現われて烈しく吠えかかりました。

七兵衛がこうして隠ヶ岡の下まで来ると、不意に一頭の猛犬

大菩薩峠 間の山の巻 三歩退いて両足を前に合せて、そうしてじっと七兵衛の面を睨 ろへ取って捨てられて摚と倒れたが、クルリと起き上って、二 たか行方知れずになってしまったのを、ここで偶然に姿を現し ことを知りました。 んでウォーと唸りつけていました。 せに後ろへ取って捨てる、痩せて弱っていた猛犬は七兵衛に後 「ムクだ、ムクだ、ムクが出たぞ、どこから出て来たのだろう」 先日、 早くも土地の人が騒ぎ立てました。 その形相を見て七兵衛は、この犬が並一通りの狂犬ではない。 七兵衛は合羽へ食いついた犬の首を抱えるようにして、力任 古市の町を騒がしたムク犬は、 あれっきりどこへ行っ

また土地の人を騒がせました。

「こん畜生、

狂犬だな」

間の山の巻 大菩薩峠 所へ沙汰をしようじゃないか、あん畜生はホントに狂犬になっ かり傍へ寄ると危ねえ、早くお役所へ沙汰をしようじゃないか」 たんで通る人の見さかいもなく、ああして噛みつくんだ、うっ ていたんだぜ」 「あの旅人は、ありゃ何だ、見慣れない人だが、気の毒だ、 「痩せてるな、 「エエ、めんどくさい」 七兵衛は急に焦れったがって、飛びかかって来た犬の眉間の お役所、お役人という声を聞くと、 もとは熊のように肥っていたが今は狼みたよう 、お役

「どこにいたんだろう、あの犬はありゃ、尾上山の後ろに隠れ

散にもと来た方へ走せ出しました。七兵衛に打たれて後ろへ飛 ところを、拳を固めてガンと打ち据えて、自分は身を飜して一 間の山の巻 先生の気象でじっとしていられるものではありません。

す。

び退いたムクは、起き直るや、驀然に七兵衛の跡を逐いかけま

落されてしまい、役人も非人も刑の執行を済まして、今ゾロゾ

気の毒な米友は、この騒ぎのうちに隠ヶ岡から地獄谷へ突き

口と山を下って帰って来るところであります。

道庵先生は宿屋をうろつき出してしまいました。どうして、

それにお絹の宿屋で上等の酒を飲ませられたものだから、

有頂天になってしまって、ひょろひょろと宿を出かけました。マネー゙ッランス

ただ好い心持で歩くのですから、どこへどう行くかわかった

間の山の巻 そんなことは構わねえ、エート、天子呼び来れども船に上らず だな、ナニ、ここは長安の酒家じゃねえ、酒家でも堤の上でも 夜気爽かにして洗うが如きうちに、星斗闌干として天に満つる した。 か――俺のところへはまだ天子様からお迎えは来ねえが、大名 の有様ですから、道庵先生、ズッと気象が大きくなってしまい 「ああ、よい心持だ、長安の大道、酒家に眠るという意気はこれ 倒れたきりで仰向けに臥て酔眼をトロリと見開いて見ると、

たようなところへ来ると、グンニャリとそこへ倒れてしまいま

ものではありません。そのうちに人家を離れて、河沿いの堤み

も診察に行かずなんて、そんな野暮なことは俺は言わねえ、大 旗本にはこれでお得意が大分あるんだよ、大名旗本呼び来れど

間の山の巻 せた伊勢音頭が、河波を渡って道庵先生のウトウトしかけたと よ好い心持でウトウトとしていると、三味線、胡弓と太鼓に合 安くもねえ、安いと高いは買いようによる」 る奴の気が知れねえ、おしなべて天下の事が十八文できまりが つくんだ、十八文より高くもなし、そうかと言って十八文より 「どうして世の中がこう面白いんだか、世間でクヨクヨしてい なんだかロジックが変になってきました。道庵先生はいよい 先生、ひとりで大気焔を上げている。

名旗本であろうとも、乞食非人であろうとも、十八文よこす奴

はみんな俺のお得意様だからどこへでも行ってやる、矢でも鉄

持を、

ころへ、それがとうとうたらりと流れ込むので、先生の好い心

またもう一層よい心持にして、ついにそのままグッスリ

大菩薩峠 間の山の巻 が、 おうとすると、その上へどさりと折重なった者がありました。 ないと見えて、 はり痛いから、 いくら道庵先生でも踏んだり蹴ったりでは黙っていられない。 「ア、 「誰だ、 十八文で有頂天になっていた先生も、 暫くすると、このせっかくの好い心持になっていた道庵先生 いやというほど頭を蹴飛ばされてしまったものです。 痛ッ」 誰だ」 申しわけに痛いと言っただけでまた眠ってしま 痛ッと言ってみたが、 頭を抑えるのも気が利か 頭を蹴飛ばされればや

「どうも相済みません、どうか御免なすって」

周章て跳ね起きると、

と夢に入ってしまいました。

大菩薩峠 間の山の巻 んだから、眼がさめて大きな欠伸をしました。見ると、一人のも少し薄らいでいたところへ、夜の河風が襟元に吹き込んだも 生にお詫びをする。 老人らしいのが小さな男を背中に引っかけて、しきりに道庵先 ものと見えました。おりからの夢を破られて、道庵先生の酔い にお詫びを申します。 「お怪我はございませんでしたか、ついこの通り病人を抱えて 「気をつけて歩きねえ」 「どうか御免なすって」 暗い中を通りかかって、ふと道庵先生の身体に躓いて倒れた。

折重なって倒れかかった人は、低い声をして丁寧に道庵先生

おりますものでございますから」

「別に怪我もねえが、ずいぶん驚いたよ」

大菩薩峠 間の山の巻 で….」 ぎ向うへ行こうとするのを、 つれてどこへ行くんだい」「へい、あの、お医者様のところま 「へえ……」 「おい、待った待った」 「お医者様ならここに一人いるよ、ごく安いのが一人いるよ」 「お医者様? 「今お前さんは、病人を抱えていると言いなすったな、病人を 「何か御用でございますか」 道庵先生が呼び止めました。 お医者様ならここにいる、ここにいる」

まだまだ先生も、決して酔が醒めてはいないのでした。

「どうも相済みません」

老人はお詫びを言って、道庵先生をとりなして、あえぎあえ

間の山の巻 もらおうか、どうしようかと暫らく思案の体であったが、すぐ に立戻って、 ては渡りに舟であります。行きかけた老人は、幸いここで見て た。酔っていてもなんでも医者でありさえすれば、急病人にとっ 「急病人でございますが、ちょっと見ていただきたいもので」 「あなた様はお医者様でございますか」 「こう見えても医者は医者だよ、医者は医者だが薬箱持たぬ」 医者には違いないらしいが酔っていることは確かでありまし

「おっと承知、さあ、病人をここへ出したり出したり」

通りかけた老人も初めはなんだか薄気味悪く思ったようでし

なるほどその人は茶筅頭をして、お医者さんの恰好をしている。

小男を背中へ引っかけた老人は、暗い中から透して見ると、

間の山の巻 郎だな」 大人かな、そうでもない、年寄みたようでもある、おかしな野 て一通り見て、 「癲癇? どれどれ、おや、まだ子供だな、いやそうでもない、 「冗談じゃねえ、こんな癲癇があるものかい、これは打身だ」 「へえ……あの、癲癇でございます」 「何だい、 道庵先生は、裸体で気絶している小男の身体に眼を擦りつけ 病気は」

「ええ……」

「高いところから落っこったんだい、それもちっとやそっと高

ですから、安心したものと見えて、背にかけた小男をそこへ卸 たが、道庵先生が至って気軽でその上に酔っていると見たもの

```
間の山の巻
    「ある!」
「ありますか」
```

「ほんとに生き返りますか」

大菩薩峠 「生きる!」

たんだ、

人をばかにしていやがる」

「お静かに?」よし、それでは静かにしてやる」

道庵先生は、わざと段違いの低い声をする。

「まだ脈はございましょうか、見込はございましょうか」

身体を一通り撫でてみた道庵先生が、

「先生、それに違いありません、どうかお静かに願います」

こに縄のあとがある、縄でギューギュー引括られて突き落され

して簀捲きにされて高いところから突き落されたんだ、

これこ

いところから落ちたんじゃねえ。野郎、喧嘩をしたな、喧嘩を

```
大菩薩峠
                                          間の山の巻
                                                繕っておかねえと、息を吹き返してからかえって苦しがる」
                                                                                                野郎のは助かるように出来ている」
                                                                               「へえ」
「へえ」
                                                                「息を吹き返させるのは雑作はねえが、その前に痛みどころを
                「まず肩胛骨が外れている、それで左の手がブラブラだ」
                                                                                                               「あたりまえの野郎なら、
                                                                                                                                                              「助かる!」
                                                                                                                                                「どうか助けてやっておくんなさいまし」
                                                                                                                                                                               「助かりますか」
                                                                                                                               老人は意気込む。
                                                                                                                助かりっこのねえところだが、この
```

「大丈夫!」

間の山の巻 噛み殺さずにはいられませんでした。 かないで澄ましていたが、傍の老人はこの場合にもおかしさを にその鉢の頭も無事だ」 「腰骨にも横骨にもこれまた異状はない、 頭 の鉢というのを鉢の頭といってのけました。

当人は気がつ

そこにも異状がない」

-胸脇の骨が折れて肺へでも触ろうものなら見込みはないが、--ヒュネネッ

「頸椎には異状がない」

「脳蓋といって頭の鉢を打ち割ればこれも望みはないが、®ラタデ

幸い

右の方の脛の骨が折

大菩薩峠

れている」

「へえ」

間の山の巻 ていた手は忽ちもとのようにひっかかります。 て腋の下へ指を当てがい、下の方へ締めつけると、ブラブラしい。 「おい、お爺さん、この人をこうして押えておいで」 懐中紙入を出すと、一挺の剃刀のようなものを引き出して、そ 道庵先生は小男を半分起して、そのブラリとした左の手を持っ

て廻る。

れで身体のあちらこちらを一寸二寸ずつ、スーッスーッと切っ

うして暗い中で、どこがどう、ここがこうということを掌を指

おかしなお医者さんだけれども、その診方の親切なこと、そ

したことはない」

「そのほか、身体中、処嫌わず打創かすり創だが、それらは大

すように言ってみせるから、はじめは険呑がっていた老人が、

そぞろに信頼の念を高めてしまいました。

大菩薩峠 間の山の巻 る 「行ってやるとも」 「有難うございます、明日も来て下さいますか」 「早く家へ連れて行って寝かしておけ、 「生き返りましたか」 明日また俺が行ってや

「そうら生き返った」

頭と顔へ捲いて肩井を揉んで背を打つと、

道庵先生は折れた右足の脛を晒で捲く、濡らして来た手拭を

欲しいな、その三尺で結構、ナニ、晒を持って来たって、そん

濡らしておいで、絞らないでいいよ、それから、足へ捲く布がぬ 「お爺さん、手拭を持っているかい、その手拭を河原へ行って

ならなお結構」

大菩薩峠 お絹は、二見ヶ浦の海岸の清涯亭という宿の離れにつづいた

四阿の中で、長いこと人を待っているのでありました。やがて、季素や

間の山の巻

から」

「安心しろよ」

道庵先生はまた堤の上へゴロリと寝てしまいました。

たことはどうぞ御内分に。人に知られると困るんでございます

わたしがこうしてここで先生のお世話になっ

「それから先生、

直ぐおわかりになりますから」

「有難うございます、大湊の船大工で与兵衛とお尋ねになれば

「大湊の与兵衛……よし来た」

間の山の巻 をしてお絹を眺めたままで立っています。 ておりました」 であります。 「お前様は 「宇津木さん、ここよ」 お絹の方は、 この武士は宇津木兵馬でありました。兵馬は呆れたような面が 若い武士は歩みをとどめて笠を傾げてこちらを見る。 お松の仮親のわたくしでございます、さっきから待っ いっこう平気らしく、

「宇津木さん、さだめてまたかとお驚きなすったでしょう、け

松林の中へ入る。

。武士というけれども、

、まだごく若い人のよう

編笠を被って海岸伝いにやって来る一人の武士がありました。

武士は松林の中を歩んで来る、お絹は、それを迎えるように

間の山の巻 うござるぞ あなたのお姿を見たものですから、こんなことになってしまっ て面白いことのように見えるらしく、 「そんな悪戯をするつもりではありませんでしたけれども、つい 「この間、古市の町で、背の小さい男が竿を振り廻していた時、 兵馬の真面目になって苦りきっているのが、この女にはかえっ 兵馬は苦りきって、なおお絹の面を睨めていると、

たにお話をして上げなければならないことがあるのですから」 れどもね、今度は前とは違いますよ、前とは違って真剣にあな

「お前様は御身分柄にもないことをなさる、嗜まっしゃるがよ

それへ槍をつけたのは宇津木さん、あなたでしょう、運悪くそ

れをわたしが見ちまったのですよ。珍らしいところで珍らしい

間の山の巻 も聞きたいし、わたしからはぜひともあなたにお知らせ申した 呑みきっている物の言いぶりでしたから兵馬は勃然として、 までお呼び申したのですよ。よく来て下さいましたね、ホホ」 ここまでお呼び申したのは、あなたからはお松やなんかの行方 の名で手紙も出されませんから、七兵衛の名を借りてあなたを いたんですよ、そうしてまたあの手紙を上げて、あなたをここ 「そんなにお怒りなさるものじゃありませんよ、まさかわたし 「お暇を申します」 袖を振って歩き出すと、 自分が綱を引きさえすれば兵馬などはどうでもなるように、

いことがありますから……」

人に会って、わたしはなんだかゾクゾクと懐しくなってしまっ

たものだから、あれからちゃんと、あなたの行方を突き止めて

間の山の巻 なたはそれを知ってますか」 「そりゃ偽りだ、出立の時まであの通り壮健でござった先生 「どうですか」 「島田先生が亡くなられたというのは、そりゃ真実か」 「あの、宇津木さん、兵馬さん、島田先生は死にましたよ、 「ソレごらんなさい?」 「ナニ、島田先生が亡くなられた?」 ズカズカと立戻ってしまいました。 この一語は兵馬を驚かさないわけにはゆきませんでした。

とすると、

兵馬はそんな言葉を耳にも入れず、さっさと行ってしまおう

が……」

「偽りなら偽りでようござんす、御信用のない者にお話をしたっ

大菩薩峠 間の山の巻 うことのほかには想像が届かないのでありました。 間の手ではどうしても防ぎきれない天災によって殺されたと思 また苟且の病に命を取られるような脆い鍛錬のお方でもない、 わけではありませんでした。まだ老病で死なれる歳ではない、 いわんや刀刃の難によって命を殞すことのあり得べきお方では 「あなたという人は、思いのほか不人情なお方ですねえ、現在自 「それは偽り、嘘にきまっている」 兵馬はそれを言い消してみたけれども、決して心が安んじた もし先生が死なれたとすれば、病難、剣難のほかの、人

て詰りませんから」

「そんなはずはない、

嘘だ、偽りだ」

分のお師匠様が亡くなられたのにそれも知らず、せっかくそれ

を知らして上げようとするのをお耳にも入れず、それで武士道

間の山の巻 人ならば知らぬこと、島田先生が人手にかかって――そんなこ じゃ、人手にかかって亡くなられる、そのようなはずがない、余 「島田先生が人手にかかって……いよいよそれは偽りじゃ、

ましたねえ、あの先生がまあ……」

「そのお話を聞いた時は、わたしのようなものでも涙がこぼれ

「ナニ、人手にかかって?」

之助先生とも言われるお方が、人手にかかってお果てなさると

に取られるのが口惜しい、わたしだって時と場合によれば、ず がこんなで身を持ち崩してしまったから、真剣に言っても浮気 とやらが立ちますならば御勝手になさいまし……わたしは人柄

いぶんこれで涙脆いことがありますのよ。あの御徒町の島田虎

と、そんなことのあるべきはずがない、天地が逆さになったと

大菩薩峠 間の山の巻 ました」 を手にかけるような手利はないにきまっている、それはあなた のおっしゃるまでもないこと、 田先生は人手にかかるお方ではない、今の世に尋常であの先生 でようございます、もう何も申し上げますまい。 にも刃物ばかりが人手ではなし……」 毒?」 「そんならどうして先生が」 「毒ですよ、島田虎之助先生は毒を盛られておなくなりになり 「それほどわたしの言うことを御信用なさらないのなら、それ 兵馬の渾身の血が逆流するかと見えました。 兵馬の舌がおのずから縺れる。 誰でも知っていますけれど、 なるほど、

大菩薩峠 間の山の巻 す られることではない、お礼を申し上げまする」 ないのでありました。 が届いて嬉しい」 ことか、それがおわかりになれば、わたしはもうお暇を致しま た、それではこれでお暇を致しましょう」 「よく教えて下された、嘘か真か、そのような疑いを申してい 「いいえ、お礼では痛み入ります。ああ、これでわたしの心持 「わたしのお呼立てしたことが、真剣でしたことか浮気でした 「ま、待って、もう暫く」 兵馬の眼から涙が落ちる。 攻守勢いを異にしてしまい、 兵馬はお絹の袖を捉えてはなさ

「それだけお話し申し上げたら、もうわたしの役目も済みまし

間の山の巻 場ではお絹を怒らせて袖を振り切ってここへ来てしまいました。 ほどなく兵馬の姿は大湊の町の船着場へ現われました。あのほどなく兵馬の姿は大湊の町の船着場へ現われました。あの

ところで、ゆっくりお話し申し上げたいと思います」

「いや、それは……

兵馬はそれを躊躇しました。

の清涯亭という宿、あそこに申し付けてありますから、静かなずらがらい。

んなところではお話をしにくいから、あれへ参りましょう、あ

「知っているだけは、お話し申しましょうとも。けれども、

「どうか御存じならば、もう少し詳しくそのことをお話し下さ

らぬか」

「兵馬さん」

お松は船の仕事着ではなく小綺麗の身扮をして、船着場の茶にない、

```
大菩薩峠
                                 間の山の巻
                                                                        たし
                                                                                                                           ついておりまする
                                        「あ、
      「お前の親類じゃ、当ててみるがよい」
                                                                                         「松林の中を無暗に歩いたものだから、ずいぶん息も切れまし
                                                                                                                                           「藪の中やなんかをお通りなさったらしい、こんなに草の実が!
                                                                                                                                                           「二見の方へ」
                                                                                                                                                                            「今日はどちらへおいでになりました」
                       「珍らしい人とおっしゃるのは?」
                                                        兵馬は腰掛に休んで茶を飲む。
                                                                                                         お松は兵馬の袴の裾についた草の実や塵を払ってやる。
                                        それからお松、
                                        今日はまた珍らしい人に会ったぞ」
```

「わたしの親類と申しましても……」

屋に待っています。

間の山の巻 坂のあの花のお師匠さんじゃ」 「いや、そんな人ではない。言ってみようか、それは湯島妻恋 お師匠さんに?」

お松は、絶えて久しい妻恋坂のお師匠さんのことを兵馬の口

で慾が深くて、そのくせ口前のよい人。

本郷の伯母さんという人は、

お松を島原へ売った人、不人情

伯母さんでは……」

れらの記憶を呼び起すとあまり好い心持はしないのでした。

お松にも親類の人もある、世話になった人もあるけれど、そ

「それはお前にとっては怖い人ではない、どちらかと言えば懐

懐しい人だろうけれど、油断はできない人だ」

兵馬はわざと廻りくどく言ってみせると、

誰でしょう、わたしの親類でそんな人――もし本郷の

間の山の巻 大丈夫、心配することはない。野郎の方は少々跛足になるかも 知れないが、身体のところは間違いっこなし、薬は飲まなくっ な感じがして、直ぐに呼びかけようとしていますと、道庵先生 庵先生でしたから、兵馬も驚いたが、お松の方がいっそう意外 ても放っておけば自然に癒る」 はお松の方には気がつかず、与兵衛に向って、 「もうここでよろしいから帰ってくれ給え。うむ、もうどちらも 「いや、与兵衛さん、御苦労御苦労、もうここでよろしい」 それは仙公を連れて、船大工の与兵衛に送られた長者町の道 町の方からがやがやと噪がしい人声、

から聞いて、そぞろに昔のことが思われてたまりません。この

のおかげさまで」

「へえ、どうも有難うございます、ほんとにどうも、全く先生

大菩薩峠 間の山の巻 人であって、竜之助は、やはり与兵衛の家に隠されているもの 之助のことでありましょう。 もちろん米友のことで、眼の方は難物だというのはたぶん机竜 からな。 しなさい」 のうち江戸へ出て来るというから、来たら拙者がところへよこ 「へえ、何から何まで有難うございます」 「それから、あの眼の方なあ、あの眼は野郎から見ると難物だ さきの晩、与兵衛が伝馬で若山丸へ頼みに行ったのはお玉一 ここで道庵先生が、野郎の方は少々跛足になると言ったのは 与兵衛は繰返してお礼を言います。 与兵衛は道庵の前へしきりに頭を下げる。 しかしまあ、 ああしておけば十日や二十日は持つ、そ

と見なければなりません。

大菩薩峠 間の山の巻 しまい、 伊勢参りかな」 「道庵先生」 「いいえ……」 「ああ、そうであったか、それはそれは。 「いつぞや、 「おやおや」 先生、 あちらからも道庵、こちらからも道庵で、 今度は兵馬が呼びかける。 道庵も江戸へ帰るものと見えて、すっかり旅装束になってい その時にお松が 道庵先生」 先生のお世話になりました江戸の本郷の……」 やはりお前さんもお 先生めんくらって

「おそろしく道庵の売れのいい日だ。

お前さんはどなたでした

間の山の巻 りかね」 その節はえらいお世話になりました」 お帰りなら、一緒に舟で行こうではないか」 て貰って、それから宮へ行こうというのだ、 お世話になってな、せっかくの好意だから、舟で桑名まで送っ 先生はこれからどちらへ」 「拙老は伊勢参りの帰りじゃ、この与兵衛さんという人の家に 「いいえ違います、 「そんなこともあったけかな……お前さんもなにかね、 拙者は別に用向があって上方から――して お前さんも江戸へ 伊勢参

かね」

「浪士に追われて、先生のお宅へ走り込んだことがありました、

大菩薩峠

「私共は、あの大船に乗るようにきまっておりますから」

「左様でござるか。それでは舟の出るまで、ドレーぷく」

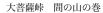
間の山の巻 遊んでいられるものでないから帰りの仕度をする。これらの連 やくざ旗本を先へ帰して、ひとり残ったお絹も、そういつまで 大湊の浜を船出する。 しい。七兵衛はムク犬と一緒にどこへか駈けて行ってしまった。 もまた計らずも道庵先生の力によって幾分か視力を回復したら 米友の身体も道庵先生の力によって旧に復するし、机竜之助

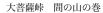
兵馬とお松とお玉とを乗せた若山丸は、十六反の帆を揚げて

道庵先生の一行は、与兵衛の仕立ててくれた舟で桑名から宮

みんな東の空であります。

中の心々はそれぞれ違うけれども、そのめざして行くところは、





底本:「大菩薩峠 2」 ちくま文庫 筑座書房

大振りにつくっています。 入力:(株)モモ 校正:原田頌子 2001 年 5 月 31 日公開 2004年3月6日修正 青空文庫作成ファイル:

1995 (平成 7) 年 12 月 4 日第 1 刷発行 1996 (平成 8) 年 2 月 15 日第 4 刷

底本の親本:「大菩薩峠」筑摩書房

にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

1976 (昭和 51) 年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」(区点番号 5-86) を、

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作